日本よ、今、闘論！倒論！討論！２０２４第８５７回

本当に自衛隊は戦うのか 戦えるのか

R6/5/16

パネリスト：

　伊藤貫（国際政治アナリスト）※スカイプ出演

　ジェイソン・モーガン（歴史学者・麗澤大学国際学部准教授）

　室伏謙一（室伏政策研究室代表・政策コンサルタント）

　用田和仁（元陸上自衛隊西部方面総監 陸将）

　矢野義昭（元陸上自衛隊小平学校副校長 陸将補）

司会：水島総

＊＊＊＊＊＊、

水島「皆さん、こんにちは」

一同「(礼)」

水島「日本よ、今、闘論！倒論！討論！２０２４第８５７回目の討論となります。今日は、

『本当に自衛隊は戦うのか、戦えるのか』こういったタイトルですけれども、現実の問題として５月３０日に憲法改正法を言う人達が居ます。まぁ、親米保守と言われる人達ですけども、現実には日本国憲法は１行も変えないで九条三項に自衛隊加憲という自衛隊を明記する。

これで憲法改正って言っているんですけれども、正に護憲勢力に成り果てているという今のこういうのを、この間、我々は砂防会館で、こんなものはインチキだという改正でも何でもないという形でやりましたけれども、まぁ、そういうものが岸田政権によって進められようとしています。もう一回、言っておくと、これは護憲です。１行も日本国憲法を変えません。自衛隊が居るっていうのを付け加えるだけですね。

こういうのを憲法改正と称して、あの占領憲法を日本国民に追認させる。アメリカが押し付けたんじゃないよ。もう今は日本の国民も、みんな、これを認めているんだよという様な形で、憲法改正をやろうとしているっていう、私から言うと、誠に犯罪的なことをやっているっていうのが、まぁ、それを進めている人達って、みんな、顔見知りの人達ですから。

ただ、こういうことを言わないといけないと言う状態になって来ました。こういう形で今、日本の防衛の問題も自衛隊というのは本当に戦えるのか。まぁ、特別公務員という扱いです。軍隊ではありません。だから軍人としての名誉も誇りも無い状態で、公務員として戦って下さいっていうことになる訳ですけれども、果たして、そんなことが今、可能なのか。

昨日はスロバキアの首相が銃弾に倒れて、先程のニュースだと幸い一命はとりとめられそうだということですけれども、こういった暗殺が続いております。安倍さんから始まってというか、その前からケネディ大統領、或いは朴正熙大統領、色んな形で続いてきました。この間は、ゼレンスキー大統領への警備関係者による暗殺事件もありました。続いて、こういうことでございます。

こういう形で戦争自体が様々な戦いの中で、非対称的に行われるようになってきている。ドローン攻撃も、また、ひとつの形態ですけども、本当の意味での防衛というものは一体何だろう、というようなことも今日は考えてみたいと思いまして、タイトルは『自衛隊は本当に戦うのか、戦えるのか』というタイトルで議論する為に皆さんにお集り戴きました。

では、ご出席の皆さんをご紹介します。まず、元陸上自衛隊小平学校副校長、陸将補の矢野義昭さんです。宜しくお願いします」

矢野「宜しくお願いします」

水島「元陸上自衛隊西部方面総監、陸将の用田和仁さんです。宜しくお願いします」

用田「お願いします」

水島「室伏政策研究室代表で政策コンサルタントの室伏謙一さんです。宜しくお願いします」

室伏「宜しくお願い致します」

水島「歴史学者で麗澤大学国際学部准教授、ジェイソン・モーガンさんです。宜しくお願いします」

モーガン「宜しくお願いします」

水島「そして今日はアメリカのワシントンからご出演をお願いしております。国際政治アナ

リストの伊藤貫さんです。宜しくお願いします」

伊藤「宜しくお願いします」

水島「はい。今日は、こういう錚々たるメンバーで最精鋭の議論が出来るんじゃないかと思います。ウクライナ戦争について、やっと普通のメディアがウクライナの今の戦いとか現実を報道するようになってきました。今、ロシアの軍隊が東部から、或いは北部から兵を進めているという状態ですけれども、先日、ゼレンスキー大統領暗殺が警備関係者の責任者によるものということで事件が起きました。これは、もう我々がずっと言っているんですけれども、イスラエルのネタニヤフ首相を含めて、今回、スロバキアの首相が撃たれたという本当に、こういう形で非対称的な戦争が各地で続いているということであります。

そこで、今日は、こういうものを含めまして、皆さんが今、どんな形で世界を見ているか。それと、もう一つ、これでございます。今日は別の番組でも紹介しましたけども、週刊文春の今週号です。こういう形になっています。相変わらず、ここはＣＩＡの日本支局、プロパガンダ雑誌と言われていますけど、まぁ、私が言っているんですけども『秋篠宮家の危機、警察との暗闘』＜紀子さま『あなたは使用人』警察幹部『もう人は出さない』＞昨日の暗殺未遂を考えると、もし秋篠宮家の皇族の方にこういったものが及んだ時、秋篠宮家の皇族の皆さんが警察に非協力的だったから悪い、やられて当然だとかいうキャンペーンの可能性も極めて高いです。

この週刊文春というアメリカとベッタリしている週刊誌を見ると、こういうキャンペーンを始めたんじゃないか。秋篠宮家の危機①。未だ２回、３回、続くんですね。極めて危険なので、思い切って皆さんに、こういうところの裏にあるもの、この編集者が、どういう意図を持っているのか。秋篠宮家のネガティブ・キャンペーンっていうことは、当然、解るんですけれど、それ以上に警備の状態も警察のみんなが嫌がっていると。

皇子殿下を始め悠仁親王殿下も１０メートル以上、離れてくれとか色んなことを言っているという話で、まるで本当に秋篠宮家の皇族の皆さんが警備を拒否しているとか、こういったキャンペーンをしています。これは、はっきり言いまして嘘です。こういう署名も無い記事を無責任に、文春がついにやり出した。週刊新潮はずっとやっていますけど、私が一番、怖いのは、文春というアメリカの情報機関のプロパガンダ雑誌と言ってもいいような雑誌が、このようなことを始めている。

前も言いましたけど、文春は大分前から安倍さんを批判しても菅義偉さんについては１０年間、一度も一切、批判しませんでした。当時、菅官房長官は国内から出ちゃいけない人が、ワシントンに呼ばれてと言うか、金融資本家と会っていたと。それで私は、あぁ、次は菅ですねという話をしたんですけども、この菅さんがオリンピックで、天皇陛下の横にドッカと座ったという誠に不敬千万のことをやっても誰もこのことを言わなかったということを含めると、この雑誌の持つ大きな意味、プロパガンダ雑誌としては立派なもんですけどね、そこそこの信用を持っていますから。あの菊池寛がつくった文芸春秋社が戦後、こういう風に変わるのかと。この典型だと思うんですけど、敢えて、こういうことを挙げて、極めて危険な宣伝戦や、そういう非対称戦が行われてきている。

暗殺も、その一環であるということですね。スロバキアの首相は、ハンガリーのオルバン首相と一緒にＥＵ欧米に反対するロシア寄りの立場をとっていた。こういうことも踏まえなきゃいけないだろうと。今日はイスラエルの問題も含めて、我々の国に及ぶ影響や、或いは自

衛隊って本当に我々の国の防衛が出来るのかということも、皆さんと共に話し合ってみたいと思います。

まず、そういう意味では、それぞれの皆さんから、お話し戴きたいと思うんですけど、今日は逆にスカイプの伊藤さんからね、お話を聞きたいなぁと思うんですけど、伊藤さん、突然ですけれども、今の現実の世界をどう見ておられるかも含めて、この自衛隊の日本の防衛というものついてお話し戴けるといいんですけども、はい」

伊藤「はい。僕は、ちょっと失礼な言い方ですけれども自衛隊には何も期待しておりません」

水島「はい」

伊藤「自衛隊が戦えるとは思っておりませんし、自衛隊の幹部の人達も自国の運命を自分達で決定して自分達で守ろうということは勿論、ここに来ておられる用田陸将と矢野陸将補は例外中の例外ですけれども、自衛隊の幹部の人達も、そういう能力を持つつもりが無いし、多分、そういうことをやる能力も無いだろうという気がします。現在の国際政治に関して言えば、言うまでも無く益々悪くなっています」

水島「うん」

伊藤「アメリカが、このウクライナ戦争を仕掛けて、それで、ロシアを戦争せざるを得ないところに追い込んでいって、２年半経ちましたけれども、国際政治の不安定性というのは、もう、どんどん悪化しておりまして」

水島「うん」

伊藤「アメリカのワシントンの人間は、この戦争を１０年間続けて、ロシアを叩き潰すのだと。そういう１０年戦争にするというようなことを言っておりまして、そういうことを、実際にやると、どういう結果になるのかっていうことをアメリカ人は考えてないんですね」

水島「うん」

伊藤「でもユーゴスラビアに対する軍事介入にしても、イラク人に強烈な経済制裁、医療品制裁をかけて百数十万人を死亡させたことに関しても、２００３年の１００％、嘘をついて、イラクは大量破壊兵器をもっているはずだと。我々は証拠を握っていると言って始めたイラク戦争にしても、それからシリア、リビアに軍事介入して両国で１５０万人の民間人を死亡させたことに関しても、アメリカ人は全く反省していないです」

水島「うん」

伊藤「これは反省する、それから英語で言うと reflect、じっくり考えてみると。自分達のやっていることが正しいのか正しくないのか、成功しているのか、していないのかということをリフレクトするということが、アメリカ人は全く出来ないんですね。それで恐るべきことに、僕は２０年ぐらい前までは、ちょっとヨーロッパ人に期待しておりまして、ヨーロッパには未だ思慮深い人が残っているから、アメリカを宥めるっていうか、そういうことをやっちゃいけないよとアドバイスしてくれるんではないかと、ヨーロッパ人に期待していたんですけれども、しかも勿論、２００３年の国際法違反のイラク侵略戦争の場合は、フランスとドイツが反対に回りましたから、未だ、そういうことをやっちゃいけないよと言うヨーロッパ人が残っていたんですけども、今のヨーロッパを見ると、オルバン首相のハンガリーを

除いて、そういう真面なアドバイスをする人がもう残っていないと。

そうすると、結局、アメリカ人だけじゃなくてヨーロッパ人もどうしようもないと。馬鹿になっていると。国際政治学のリアリスト学派、リアリスト学派じゃなくても保守派の国際政治学者っていうのは、戦争が起きる原因を３つに分けるんですね」

水島「うん」

伊藤「ひとつはHuman Natureと。要するに人間が権力を欲しがると。人間は何でもいいから、権力を握って、それで自分が優越な立場に立つのが好きだから、理由は、あとからくっつける。とにかく自分にとって気に食わない国があると、その国を叩き潰す為に、色んな口実をでっちあげると。これがヒューマン・ネイチャーであると。一番、有名なのはハンス・J・モーゲンソー（Hans Joachim Morgenthau）さんが、そういうことを言っています。

人間というものも国家もanimous dominant、dominateするAnimal Spirits、要するに相手を打ち倒して自分が優位に立って勝ち誇ると。そういうことをやりたがる人間の性格があると。

二つ目の戦争の原因として、アメリカ人が大好きな悪い政治イデオロギーを持っている国を、正しい政治イデオロギーを持っている我々アメリカ人が叩きのめすんだと。だからアメリカというのは、これ、ウィルソニヤンって言うんですけれども、アメリカというのは自由主義と民主主義を世界に広めるという凄く正しい事をやっているから、自分達にとって気に食わない国はauthoritarianism、権威主義であるとか、それから、勿論、 Totalitarianismであるとかね、それから軍国制であるとか、そういうイデオロギーの難癖をつけて戦争を吹っかけてもいいんだと。これが二つ目の戦争の原因ですね」

水島「うん」

伊藤「三つ目は少数派で学者の間では有力ですけれども、一般のマスコミとか、政治家は、あまり言わないんですけれども、国際政治学のneo-realism（ネオリアリズム）、もしくは、structural-realism（ストラクチュラル・リアリズム）、構造的なリアリズムと言いまして、この考えを広め出したのはカリフォルニア大学のバークレー校とコロンビア大学で教鞭をとっておられたケネス・ニール・ウォルツ（Kenneth Neal Waltz）さんです。勿論、我々の好きなシカゴ大学のジョン・ジョゼフ・ミアシャイマー（John Joseph Mearsheimer）とか、それからハーバードのスティーヴン・マーティン・ウォルト（Stephen Martin Walt）、それからＭＩＴのホゼなんかも、この三番目の考え方で、要するに国際構造には世界政府が存在しないと。

それから何が一体、正しいのか間違っているのかっていうことを最終的に決める裁判所も、残念ながら存在しないと。勿論、国際裁判所っていうのはありますけど、覇権国は国際裁判所の言うことなんか無視できるんですよ。勿論、イスラエルも覇権国ですから国際裁判所が、どう見ても、これはジェノサイドだという風に言ってもイスラエルは、あっさり無視できる訳です。ですから国際構造っていうのはアナーキーであると。無政府状態であると。だから戦争が起きるんだと。こういう３つの戦争の原因を説明する人が多いですね。

もう一度、繰り返しますと、最初がヒューマン・ネイチャー、人間というのはそういうものだと。二つ目が悪い政治イデオロギーがあるから、悪い政治イデオロギーを正しい政治イデオロギーを持っている国が叩きのめす。それから３つ目が国際政治っていうのは無政府構造

になっているから、要するに正義とか何が正しくて何が悪いんだっていうことが決着しないから実力のぶつかり合いになると。僕自身は今迄、三番目の考え方をとることが多かったんですけれども、アメリカが３０年間、全く不必要な戦争を繰り返し、全く不必要な軍事介入を繰り返し、それらの十数回の軍事介入、もしくは戦争行為によって少なくとも４００万人を死亡させているんですね」

水島「うん」

伊藤「これは物凄く邪悪なことですよ」

水島「うん」

伊藤「それでね、これは単にウォルツさんの言う国際構造がアナーキーだから、こういうことをやるっていうのとは別に、もっとドス黒い覇権欲ですか、戦争欲」

水島「うん」

伊藤「とにかく１９９２年以降、アメリカだけが世界を支配する一極覇権体制になったと。Unipolar Hegemony だと。我々は現在、Unipolar Hegemony、一極覇権の世界に住んでいるから弱い国は全部、叩きのめしてもいいんだと」

水島「うん」

伊藤「それで自分達が軍事介入したり内政干渉したりして他の国にクーデターを起こさせて、その結果、何百万人が死のうと、So What と、それがどうしたと」

水島「うん」

伊藤「もう、これは人間性に潜むドス黒い権力欲、覇権欲が表にうわぁ～っと出て来て、とにかくロシア人をここまで追い詰めて、しかも次の１０年間、追い詰めて戦争を続けようと。冗談抜きで、こんなことをやっていると第三次世界大戦になるんですよ」

水島「うん」

伊藤「最近、ロシア政府は、中南米とか中東のイスラエル以外の国にも核武装させようじゃないかとか言い出しているんです」

水島「うん」

伊藤「要するに、例えば中東で、エジプトとサウジアラビアとイランに核兵器を持たせると」

水島「うん」

伊藤「そうするとアメリカは完全に中東における影響力を失うんですよ」

水島「うん、そうですねぇ」

伊藤「それから中南米ではメキシコとブラジルに核兵器を持たせようと。そうするとアメリカは中南米で勝手なことが出来なくなると」

水島「うん」

伊藤「だから核兵器を拡散させて、アメリカのこの様な横暴な振る舞いを阻止するんだと。

そういうことを言い出すロシア人まで増えて来たんですね」

水島「うん」

伊藤「僕の言いたいのは、要するに、どんどん悪くなると。これは、やっぱり人間のイデオロギーがどうのとか、国際政治のストラクチャーがどうのこうのって言うよりも、人間の内部に潜むドス黒い権力欲。戦争欲、覇権欲というものが益々醜く表面に出て来たという感じがします」

水島「はい、なるほどね。そういう３つの点を今、挙げてくれましたけども、はい。じゃあ、続いて皆さんに聞いてみたいと思います。モーガンさん」

モーガン「あ、私ですか。有難うございます。今日も誘って戴いて有難うございます」

水島「はい」

モーガン「自衛隊について話すということですが本当に恐縮です。軍隊に一日も入ったことが無いし、しかも軍隊の先生の目の前で話す事は本当に恐れ入りますが、ひとつだけ言おうと思っているんですが、基本として、私は自衛隊を尊敬している人間です。でも、今の自衛隊は、アメリカの軍隊の同じような方向に走っているではないかと考えています」

水島「うんうん」

モーガン「皆様、多分、覚えていらっしゃると思うんですが、１５年ぐらい前、田母神俊雄先生の事件があったじゃないですか。その時、私は、その田母神先生がお書きになったエッセイを読んで、あぁ、これは素晴らしいと思いまして、やっと自衛隊の中から本当のことを言う人が現れたと」

水島「うんうん」

モーガン「でも、そのあと直ぐに首になるとかで、その時から自衛隊は、ちょっと違うなと思うようになりました。それで、最近、荒谷卓という方にお目にかかりまして、その方は、立派な男ですよ」

水島「うん」

モーガン「自衛隊の方で、詳細は、よく解っていないんですが、荒谷先生はもう自衛隊から離れたようで、もしかしたら自衛隊の中で何かをご覧になったかなぁと思って、要は、アメリカのように本当の愛国者、国を愛している人が自衛隊とか軍隊に入りたいと思うのは当然ですが、今のアメリカ、又、今の永田町は、それを悪用しているような気がします。愛国精神とかね」

水島「うん」

モーガン「一番、顕著になっていたのは、あれは言わないんですけれども、あるものを拒否して粛清された。アメリカでも軍隊から大勢、退軍させられたケースがあって、今になってアメリカの軍隊は、ただの Walk Army になり下がっていて、全く信頼できないと思います。アメリカの軍隊は逆に怖いです。今、アメリカの軍隊に残っている人は逆に一番、危ないんじゃないかと。

イデオロギー的には納得できているみたいな感じで、日本の自衛隊は未だマシと思うんです

が、永田町は一応、大前提としては永田町のグローバリストは日本人が大嫌い」

水島「うん」

モーガン「この間の環境省の問題でも、もう丸見えになったんですが、日本の政府は日本人が大嫌い」

水島「うん」

モーガン「ということは、そのような連中が自衛隊を派遣しても、日本人を殺す為に派遣するんじゃないかと」

水島「うん」

モーガン「自衛隊の中からも物凄い圧力があるようで、例えば、この間、テレビで観たんですが、何かハラスメントの事前防止のような訓練があって、もう馬鹿々々しいものをやっていて、中国の侵略に備える訓練をすればいいのに何か阿呆らしいアンチハラスメント訓練とかをさせられて、もう自衛隊の方々は本当に可哀想だなと思っています」

水島「うん」

モーガン「要は、三島先生が自衛隊を目覚ませようとしたじゃないですか。私は最近、もう一度、あの檄文を読んだんですよ。三島先生がお書きになった檄文は素晴らしい。それで、笑われたじゃないですか。バルコニーに出て、あのようなことを言って嘲笑された。嘲笑われたと。まぁ、そんなものじゃないかと考えているんですが」

水島「うん」。

モーガン「最近、私がよく言っていることですが、繰り返して恐縮ですけれども、岸田っていう人は、この日本をワシントンに売り出した。完全に売り出した」

水島「そうですね」

モーガン「あの人は、もう売国奴の頂き。今迄、歴史を調べても、あのような売国奴は多分、存在したことが無いと」

水島「うん」

モーガン「ニコニコしながら全国を敵の国に売り出した」

水島「はい」

モーガン「あのようなヴィドクン・クヴィスリング（Vidkun Quisling）とか、フィリップ・ペタン（Philippe Pétain）とか一時的に存在するけど、あの岸田は珍しいタイプですね。あのような売国奴。今日の拝米タイムズ(産経新聞)を買って、ちょっと読んでみて、また驚いたんですが…」

水島「うん」

モーガン「これは凄いですよ。この拝米タイムズは完全にＣＩＡメディアです。それは間違いないと思います。デニス・ブレアっていう人がクローズアップされていて、太平洋軍司令官とか、オバマ政権の時に国家情報長官とか、現在は、これがポイントですよ。現在は米シ

ンクタンクの全米アジア研究所、ＮＢＲに所属するとか。

このＮＢＲというのは、どういう存在かと言うと、私が２年前、あの存在、あの組織と勝負しました。何故かと言うと、私とマイケル・ヨーンという人と、あと私が所属している組織の悪口を言っているレイシスト、人種差別的なことや誹謗中傷ばかりを書いている人物で、名前はミンディ・カットラー。ミンディ・カットラーという人は、２００７年にアメリカの国会で慰安婦問題をもって日本を批判する法案を採決させた人間で、要は反日活動家です」

水島「うん」

モーガン「それで、あの人が私とマイケル・ヨーンとか、私の所属する組織をバッシングしていて、それに対して反論が何も出来なくて、もし反論しようとすれば、それは削除されるとかで、私がそのサイトに行って調べたら、内部は物凄い日本バッシングばかりが書いてあって…」

水島「うん、うん」

モーガン「要はＮＢＲの本音は、日本が大嫌いです」

水島「うん」

モーガン「表では協力しようとか日米同盟万歳って言うんですけれども、本音としては日本を見下していて、私の事はどうでもいいんですけれども結局、私が猛反発して、そのサイトのチャットを全て削除して貰った」

水島「うん」

モーガン「そのようなバッシングをすれば削除しろと、そうやって貰ったんですけれども、この坂本一之という人ですかね。この方が拝米タイムズのフロントですよ。拝米タイムズのフロントに、あの研究所に所属している明らかにアメリカの工作員の発言をそのまま掲載して、このようなことばっかりで、このような連中が憲法改正しようとか、この間、第２６回憲法改正フォーラムがあって、ＣＩＡよしこっていう方が…」

一同「(笑)」

モーガン「また憲法改正しようと言っていて、要は、いくら愛国者だと言っても、これから、明らかにワシントンが自衛隊を特殊部隊として使って、次の戦争に巻き込もうとしています。自衛隊の方々は、これから自国の為じゃなくてワシントン、正確に言うとブラックロックの為に死にます。それは、もう断言できます。自衛隊を尊敬していますけれども、自衛隊を操っている人物は完全にワシントンの死のカルト。

先程、伊藤先生がおっしゃったアメリカ人は、反省できないというのは、ちょっと違うと思うんですが、我々は猛反省するんですよ。でも、それが感情で溺れてしまって、何の効果にもならない訳で（失笑)、同じことを何回も何回も何回もやって同じ過ちを」

水島「繰り返すんだね」

モーガン「次の過ちはアメリカ国内と、まぁ、敵の国の人々だけじゃなくて、日本の方々も大勢、死ぬと。それは自衛隊が最先端に派遣されて一番先に死ぬと思います。以上です」

水島「そうですね。そこは非常に大事な点でね、私も間も無くアメリカの雇い兵として日本

の青年達が死ななきゃいけない。まぁウクライナもそういうところがあったじゃないですか」

モーガン「はい」

水島「まぁ、そういうようなことが、あのキャンベルが、こっちに移って来て国務副長官になりましたから、あのヌーランドから替わったっていうのは、そういう表れの一つのシフトが出来つつあるのかなぁっていう気がしますね」

モーガン「はい」

水島「はい。大変、面白いＣＩＡ（笑）」

モーガン「ＣＩＡよしこ。注意しましょう」

一同「（笑）」

水島「あの大会で、私も言われたそうですが『チャンネル桜の水島社長が、私の事を売国奴と言っているようですけど、それを励みにして、みんなで団結して頑張りましょう』と中で言っていたそうですけどね」

モーガン「普通、そういうことを言われたら、私は猛反発しますよ。このサイト、ＮＢＲっていうサイトで誹謗中傷を受けて、それを励みだと思わなくて、それに反論しましたよ」

水島「まぁ、そうですね（笑）」

用田「第二次大戦前の太平洋評議会」

モーガン「はい」

用田「要するに日本を戦争に追い込んだのと一緒ですね」

モーガン「そう、同じです」

水島「そういうことですね」

用田「その世界の…」

水島「それが、ぴったり合いますね」

用田「二番目ですね」

水島「はい、そうですね」

モーガン「はいはい」

用田「だから、もう一回、今、日本を追い込んでいるんです」

水島「そういうことですね」

モーガン「そう、その通りですよ。おっしゃる通りです。はい」

水島「はい。有難うございます」

モーガン「はい」

水島「では、室伏さん、お願いします」

室伏「はい。お二方を前にして、私は何を喋ろうかなぁと思って（苦笑）」

用田「聞いていますから、どうぞ言って下さい。はい」

室伏「ご存じのことを僕が繰り返してもと思いながら、今日のテーマが『自衛隊は戦うのか戦えるのか』ということなので、まず、そこからお話をしたいと思うんですけど、自衛隊は、形式上っていうか建前上と言いますかね、見た目は軍隊のように見えると。ただ、先程、お話になったように憲法上は、そもそも交戦権を放棄している訳ですから、主権を自ら制限するっていう馬鹿なことをやっているので、非常に軍隊みたいな中途半端な存在、なんちゃって軍隊っていうか、大変、申し訳ないんですがそれが実態であると。

自衛隊の隊士の方々は国防の為に、やる気は満々っていうか、そういう気持ちは、おありだと思うんですが、まず実態として根本的に戦えないというか国の交戦権を放棄している以上、もう、そこからも戦えないことになっていると。もっと細かく申し上げれば、法令上も自衛隊程、まぁ、御承知の通りですけども防衛出動というものが無ければ、自衛隊法の八八条は、防衛出動時の武力行使っていうことで、これは出来ないと。

それで防衛出動って、どうするんですかと言うと、これは国会の決議にかかり占められているということですから、結局、敵が攻めてきました。どうしましょうと言っても、その間は何が適用されるかと言うと、警察比例の原則で警察職務執行法第７条の警察官が、凶悪犯が来たぁ一って言って警棒を振り回しても駄目、盾で、こうやって、もっと槍みたいな棒でやっても駄目っていう時に撃ちますよね。その範囲でしか使えないということですから、その意味でも、大体、戦争なんて敵がこれから来て、何時何分何秒に始まりますと。じゃあ、それに合わせて逆算して決議を作って国会で議決しましょうなんてね、そんなこと出来る訳がないじゃないですか。

だから完全に戦うことが前提になっていない。むしろ戦わせない為の法制になっていると。憲法もそうだけど、自衛隊法自体が、そういう風な法制になってしまっているということですから、制度論から言うと、もう一回繰り返しますけども、戦えないので軍隊もどきと。で、これは伊藤貫さんが何度か指摘されていますけども、本来であれば、この戦後７０年以上の中で戦える軍隊にすることは充分、可能であったにも拘らず、それを拒否してきたと。

だから、そもそも、これまでの日本の戦後の政府にも売国総理とか、そういうのが居た訳ですけど、少なくとも国家観はあって、その中で自国の防衛っていうことを考えているかという風に楽観視していたんですが、結局、蓋を開けてみたら、そんなことすら無かったと」

水島「そうですねぇ」

室伏「ドイツの場合、まぁ、ドイツまで押さえつけられていますけど、ドイツも終戦以降、ずぅっと、いかに元々のドイツを復活させるかっていうことを考えていたという風に聞いていますが、日本というものは一切、それをやってこなかったと。勿論、その為に努力をされた方っていうのは居たんでしょうけど、メインストリームではなかったんでしょうねと。まぁ、すみません、これは私の勝手な想像でありますけども。

ですからこの現実というものを前提にしないと、日本の国防の話は有効な議論と言いますか、具体的な建設的な議論とかいうことが出来ませんし、よく国防だとか安全保障だって言う方は憲法九条を変えましょうっていう話しかしないんですよね。他の話もされているのかもし

れませんけど、結局、表に出て来た時に憲法九条しか言わないと。

憲法九条以前に、あの憲法自体が日本というものをアメリカの属国の、よく言えばおとなしいマルチーズみたいな立場に置いておく為の憲法な訳じゃないですか。そこを変えて独立国としての日本にしなきゃいけないんですけど、その議論っていうのは無くて、とにかく憲法をいじれば、私は保守だ、になっている。例えば、あの日本維新みたいにね、統治思考の話があるんだけど、地方自治がどうこうとか、いや、そんな細かい話というのは法律に落とせばよくて、あれに関しては現行憲法の地方自治の本旨は云々で、具体的な内容を全て法律に落としている、法律化している訳ですよね。

まぁ、そうやってすればいいだけの話ですから、何か憲法改正自体も、俺は保守なんだって言う為の、まぁ、何て言うか記号として使われてしまっているということで、そんな中では実体的な憲法議論が憲法改正議論なんか出来る訳が無い訳ですよね」

水島「うん」

室伏「ただ、その議論をするための前提としては、今、申し上げたような話があるし、あとは世界情勢に関しては、冒頭に伊藤貫さんから色々と詳しいお話をして戴いた訳でありますけど、そういう認識を日本人が持っているのかって言うと殆ど持っていないと」

水島「うん」

室伏「今、日本のおかれた状況って何ですかと言ったら、ロシアが居て北朝鮮が居て、中国が居て、そしてアメリカもそうですよね。アメリカは抑えつけているんですから、こういう核保有４か国に囲まれていて、いつ、どう攻撃されるか分からない。何をされるか分からない。勿論、アメリカの場合はＣＩＡとかスノーデンか何かが確か、暴露しましたけど、いざとなったら、日本の、そのインフラ、電気とか、全て止められるような、スパイウェアって、それを仕掛けられていると。まぁ、そうなんでしょうね。僕、実際、そんな話をスカイプ越しの、スノーデンの講演会がありまして、ちょっと、左系の講演会だったんですが行ってみた時に、はっきり、そう言っていました。私は、それを目の前で聞いていますんで」

水島「うん」

室伏「ですから、そうなってしまうんでしょうね、ということで、まぁねぇ、言っていけばキリがないんですけど、日本人自体が、日本政府自体が、あまりにも日本の国防安全保障っていうものを楽観視し過ぎて来ているっていうふうなことがあることに加えて、これ、以前、伊藤貫さんと議論したんですけど、日本人が、あまりにも、例えば国連とか国際機関というものを信じ過ぎているというか、さも、国連は世界政府かのように考えていて国連が平和の象徴なんだ、みたいに考えているとか、国際法があるから大丈夫とか、要は法と秩序の何とかって言うじゃないですか、でも国際法なんていうものは、あくまでも主権国家同士の取り決めですから、いつでも、それは崩れ得るし、それから、結局、それが守られるかと言ったら、ある種の法執行能力である武力、力を持っているから、物理的強制力を持っているからこそ意味が出て来ると」

水島「うん」

室伏「じゃあ、今、日本、持っていますかって言うと、私の最初の話に戻っちゃいますけど、はっきり言って使えないし、持っていない訳じゃないですか。そんな国が法と秩序って、いくら言ったって、表向きはね、日本政府、岸田総理のおっしゃる通りでございますと言った

としても、心の中では馬鹿じゃないの、こいつっていう風に…」

水島「まぁ、そう思っていますね」

室伏「ほんと、お前、馬鹿だね、っていう風な…」

水島「うん」

室伏「だから、昔、まぁ私はその時代に生きていた訳じゃないですけど、昔の映画なんかを見ますとね、学生運動とか運動の闘士が、やたらと平和共存とかって言っているじゃないですか。だから（苦笑）左翼の運動闘士の平和共存の精神が見事に日本の津々浦々まで行き渡った状態になっていると。これに対しては、大変申し訳ないんですけど、安倍元総理も結局、僕は他の発言も知っていますけど、敢えて、そこだけ取り上げて申し上げますけど、あの例の平和安全法制の話がありました。あれは結局、日本というものをアメリカ軍の下請け部隊にする為の最初の仕込みですから」

水島「そうですね」

室伏「僕は、そういう意味では反対していたんですけど、その時に安倍総理が国会の答弁とかでよく言っていたのが、一国で自分の国を守る時代は終わったと。もう、それは、これから難しいんだっていうことを繰り返していて、そういうことを言う議員とか秘書とかが居たので、何を言っているんだと。主権国家であれば、自分の国はどんな手段を使ってでも自分で守るしか無いでしょって言うんですけど、そういう話をするとポカ～ンとして日米同盟とか、あと、以前、去年ですね、ＮＡＴＯの事務所を日本に置けばＮＡＴＯに日本を守って貰える、そちらの陣営に入るから強くなるのだぁ～みたいな、何かね、新しいモビルスーツでも着るみたいなイメージで語られたことがあったんですけど、私は、あれを見た瞬間に阿呆かと。何でね、自分と関係ないところの陣営に巻き込まれるんだと。

こんなことをしたら、ロシアを囲むにあたって日本も巻き込んで、要するに挟み撃ちっていうよりも、昔の黄禍論と同じで、こっちでガチャガチャとやってくれたら、ヨーロッパの方に来ないからいいじゃないっていう、それに利用されるだけでしょと。

だから、あの時はマクロンが日本なんか関係ねぇだろうって言って、事務所を置くことを反対してくれて、その時はお馬鹿なマクロンでも良識を発揮してくれたんだと思ったんですけど、でも未だにＮＡＴＯの会議に岸田総理が行って良かったとか言う人が居る訳ですよ。この辺で終わりにしますけど、とにかく、そういう現実感覚とか安全保障観とか、そういったものが全く解らないし、今、私がこういう話をするので地上波は絶対に呼んでくれませんけど、もし仮に地上波でこういう話をしたら、何を言っているんだって。

すみません、また、あと一つ思い出したので付け加えますけど、日本のミサイル防衛システムって、はっきり言って、あんなものを無力化することは簡単に出来る訳ですよね」

水島「うん」

室伏「それを大枚はたいて買わされて、しかも毎年、システムが更新するから、システム更新の投資もしなきゃいけない。つまり、それを全部、アメリカに吸い上げられていると。そんな無駄なものってね、もう、やめたいですよねっていう話を、たまたま勉強会のあとの懇親会で防衛研究所の総括研究官の方に話したんです。そうしたら、突然、『不愉快な事を言うなぁっ』って怒り始めて、何か日本が負けているぞっていうことを言った時に逆切れした

昔の将校みたいですね。でも、結局、その状況って続いているんだなぁっていうことは、よく判って、それを言ったのが防衛研究所の統括研究官ですからね」

水島「いやぁ、本当のことを真正面から見る勇気が無いんですよね」

室伏「はい、無いんだと思います」

水島「うん」

室伏「だから、もう本当に残念な現実ばかりですけども…」

水島「そうですねぇ」

室伏「現状は、そんな感じかなぁと思っています」

水島「でもね、今、言ってくれたように、国は交戦権を持たないっていうのを外さない限り、私達の国は特別公務員の自衛隊員ですから国として戦えないんですよ。ということはね、今、ウクライナでポーランド軍とか色々エストニア軍とかアゾフ大隊とかね、色んな雇い兵がやっていますけど、我々は多分、そういう形で使われる。

さっき、おっしゃっていたアメリカ雇い兵っていう、日本軍としてではなくて例えば東アジアの自由を守る為の自由アジア軍の中の一員として、我々の国の軍隊じゃないですから、つまり交戦権を認めない国の軍隊っていうのは、あり得ない訳だから、自衛隊はいつでも海外へ行って雇われるＰＫＦにしろ、ＰＫＯにしろ、色んな意味での雇い兵。こういう形の域を出ないので、これでは、実際、我々の国を守れないんですよね」

室伏「だって、本当に選挙監視員とかね、そういう形で行ったとしても武器の使用に関しては最小限とかね」

水島「そうそう」

室伏「結局、先程、申し上げた正に警察比例の原則ですから、自衛隊で行っているのに装備、まぁ、軽装備でも軽機関銃とか持って行ったとしても、何も出来ない訳ですよね」

水島「だから、多分、そこの問題は、この間、米軍との統合運用っていうのがあったじゃないですか」

室伏「はいはい」

水島「あの在日米軍の」

室伏「はい、はい」

水島「だから、そういうことは俺が決めるから、お前らは行って戦って死んで来いっていうだけの話になっちゃうという可能性がね」

室伏「はい。そう思います」

水島「自衛隊の方は中々防衛出動するのかどうだっていうね、そんなことを決断できないから、だから、そっちの方の命令系統を都合良くしたっていうね。本当に見事に国を売ってくれた増税メガネさんっていうことですけれども。はい、有難うございます。では、用田さん、お願いします」

用田「今日は『自衛隊は戦うのか、戦えるのか』という本題ですから、申し訳ありませんけども、やはり一区切りつくまで話をさせて戴きます」

水島「(笑)」

用田「矢野先輩がおられますから、ちゃんと引き継ぎますけど」

水島「はい」

用田「ここを話さなきゃならんなと」

水島「はい」

用田「先程、おっしゃられたように交戦権が無い。軍隊は交戦権を持っているんですね」

水島「うん」

用田「交戦規定を持っているんですね」

水島「うん」

用田「この交戦規定の中には自衛権っていうのもあるけれども、我々が普通、言っている警察権の中の自衛権とは全く違うんですね」

水島「違いますね」

用田「最初に手を出してもいいんです。向こうがレーダーを照射していたら、パ〜ンっと撃つんです。だから怖いので近寄らない訳です」

水島「うん」

用田「尖閣でも、そういう自衛隊を配置したとしても、怖くないから向こうは撃つんです」

水島「うん」

用田「尚且つ、今、我々の扱いは何ですかって言われた時、軍隊ではありませんと言った時に、これは基本的にアゾフだとか、或いは今、ハリコフの正面で戦っているロシア解放同盟みたいじゃないですけど、そういう組織が戦っているじゃないですか。そういうテロ組織ですよ」

水島「そうですよね」

用田「だから残念ながら、自衛官が捕まえられたら国際法では守られないんですよ」

水島「ジュネーブ条約ですね」

用田「ジュネーブ条約で守られないという状況が、ずっと続いているし、ずっと前に不審船と言って北朝鮮の武装工作船を沈めましたよね。あの時、北朝鮮と認定するまでに一か月もかかっているんですよね」

水島「うん」

用田「要は、それは何処か判らんと言って、最初、国土交通大臣扇千景さんが、いや、これは北朝鮮という風にやった。だから国家が組織的に、その犯罪、戦争に加担したという認定

をしなきゃいけない」

水島「うん」

用田「それを誰が認定するのだと。架空の議論ですよ。そういう言いたい事がいっぱいありますが、それは横に置いておいて、本当に自衛隊は戦うのか」

水島「うん」

用田「自衛隊ではなくて、自衛官は戦います。戦う気持ちは、自衛官ですよ」

水島「うん、うん」

用田「自衛官は戦います。ただ戦えるのかと言うと、戦えません」

水島「うん」

用田「方策はあるのか。方策はあります」

水島「うん」

用田「こういうことです」

水島「うん」

用田「今日、申し上げたいのは、その中でも防衛の三文書が出来て、あれは本当に外務省の作った、シビリアンの作文ですけどね、三文書は基本的に１０年前のものであって、現在、使えるかって言うと使えないと。だから戦えない訳です」

水島「うん」

用田「それから、もう一つは先程もお伝えした代理戦争の日本に於ける実態を、今回纏めてお話をしていきたいと。もう一つは、正に最後には日本を服従させる」

水島「うん」

用田「自衛隊の指揮権の剥奪というか、密約というものが、自衛隊の指揮権っていうものの密約というものが見事に上手に復活をさせます。そのからくりをご説明致します」

水島「はい」

用田「３つです。日本の防衛は時代遅れで現実逃避。逃げている訳です。１０年前だったら、私も画期的で拍手します」

水島「うん」

用田「所謂、そういう防衛をやりたいと思って、ずっとやってきて防衛費も２％。１０年前、お前は馬鹿と言われながらも２％だぞと、ずっと言い続けてきました」

水島「うん、そうですね」

用田「矢野さんも、ずぅっと核を持つべきだと言ってきて、未だ核は言っていませんけどね、一応、２％は、やっと数としてはいった。でもドイツの川口さんがおっしゃいますけども、ドイツは最初に１０兆円の基金を積んだと。それが、どうなったか判らんという話ですけど、

これをやらなきゃ駄目ですよ」

水島「うん」

用田「最初に１０兆円ぐらいのお金をポォ～ンっと積んで、これを使えと。こういう風にやらなきゃいけないのに、そうなっていないというのが、今の日本ですね。だから、これは、いっぱい書いていますけども、これを、さっと言うと、日本は現実逃避では、核保有の中露北朝鮮に対する 3 正面作戦に勝ち目なんかありませんよ。前からずっと言っていますけど」

水島「そうですね」

用田「じゃあ、外交。二つあって、これに対する対処と外交上、これを回避すると。だから外交の最大の焦点は日露修復ですよ。日本の 3 正面作戦の回避で、その為には北海道に対してアメリカが進駐しないという、所謂、国家主権を取り戻した日米地位協定の見直しは絶対に必要な訳ですよ」

水島「うん」

用田「これに取り組まない今の指揮権の解体なんて全く意味が無いという、片手落ちの世界です。だから回避をすることが、これによると北朝鮮を抑制できる可能性がある訳ですよね」

水島「うん」

用田「ロシアが今、握っているから」

水島「そうですね」

用田「だから、そうすると中国に対する１正面になる訳です、もう一回。そうすると元に戻る訳です」

水島「うん」

用田「でも今は、ロシアが手を出さないという前提で作っている我々の防衛計画の策定の暗黙の了解が崩れた訳です」

水島「そうですね」

用田「でも一方で最悪の 3 正面作戦に備えなきゃいけないとなると、もう核保有をする舵を切るしかありません」

水島「うん」

用田「これは核打撃のない、そして今、反撃能力って言っているじゃないですか、僕はもう、笑っちゃうんだけど、ほんと申し訳ない。自衛官も言っているんだけど、核打撃の無いミサイルをポン、ポンと中国に打ち返す、反撃しますと言った途端に１００発の打ち返しが来る訳ですよ」

水島「うん、核が来ます」

用田「日本は、こんな簡単なことが解らないんですよ」

水島「うん、そうですよねぇ」

用田「だから核打撃の無い反撃は自殺行為です。だから核を持たないと駄目です」

水島「うん」

用田「もう一つは、南西の壁って、あとで画をお見せします。所謂、壁を南西諸島の、立派に造りましょうというやつを１５年前からやってきた」

水島「うん」

用田「先を見て、これを対馬から沖ノ島から佐渡島から北海道まで延伸せないかんのですよ。これは３正面作戦になっただけじゃなくて、中国の活動範囲が広がっとるんです」

水島「うん」

用田「北海道まで」

水島「うん」

用田「だから佐渡島だって馬鹿に出来ませんよ。真ん中にやられれば、真ん中が抜かれますから」

水島「うん」

用田「新潟だって領事館なんて、でっかいやつを持っている訳でしょ」

水島「そうですね」

用田「あっと言う間に進駐しますよ」

水島「はい」

用田「真空地帯が。だから我々は南西諸島の防衛だけに全力を尽くした１０年前と逆、所謂、１０年前の事を今、やっていても駄目だと」

水島「うん」

用田「これを、ずっと広げなきゃいけないということですね。二番目に、自衛隊を憲法に書き加えることは国家主権の放棄だと。これは明確に申し上げます。誰か知らんけども、何とか会議とか色々ありますけどもね。国家主権の放棄ですよ。一生懸命、我々は自衛隊を憲法に位置づける為に頑張りました。そんなことでは、この国を守れない。国家主権というものが、これを放棄している訳ですよ」

水島「そうです」

用田「だから台湾防衛なんか言う前に、台湾防衛は日本防衛の延長線です。これは自衛隊を国防軍にして専守防衛、非核３原則などを廃止して、自分のことをちゃんと出来るようになってから台湾のことを言えっていうことです」

水島「そういうことです」

用田「フィリピンだって、とんでもない。アメリカはフィリピンの防衛を放棄しているんですよ」

水島「うん」

用田「何故、日本はフィリピンまで、手が届きませんよ。数もいないし」

水島「うん、その通りです」

用田「対艦ミサイルを持ってフィリピンの為にやってやるのは、アメリカじゃないですか。だからアメリカは自分が防衛努力を放棄したという証拠です」

水島「うん」

用田「それから三番目は、中露北のＡ２/ＡＤっていうものは強力です。全部が。いいですか、米軍は緒戦で第一列島戦から退避、避退をする。グアムまで逃げると」

水島「うん」

用田「これは、もう１５年前から言っているんです」

水島「うん」

用田「そして今、正に明瞭に陸軍とか海兵隊は日本に展開しませんと言っているので、前方展開戦略は無くなったんですよ。何を架空の議論をしているんだということですね」

水島「そうですね」

用田「日本は今のこの三文書では、海空優勢って書いてあるんですよ。海空優勢って、とれるはずがないじゃないですか」

水島「うん」

用田「これは海上自衛隊、航空自衛隊の名誉にかけて、あまり、それに対して言いたくないけれども、米軍は下がる、海空はどうするんだと、こう言いたい訳ですよ」

水島「ほんとにそこですよ、ほんとにね」

用田「そこは、ちょっと私も同業のよしみで、そこは突っ込みません」

水島「はい（笑）」

用田「だからアメリカは元々１５年前から中国軍に対して攻撃はしないと言っている訳です。伊藤さんにワシントンで会った時、正にＣＳＢＡという所に行って議論をして意気消沈して帰って来たんですよ。アメリカは中国本土に対する攻撃はしませんと」

水島「うん」

用田「大統領決心ということは『しません』っていうことですよ」

水島「うん」

用田「それは長期戦ですから、どうやっても長期戦だと」

水島「うん」

用田「だから彼らはＡＵＫＵＳのラインに下がるんです。あの後退ラインですよ。とんでも

ない話、あんな所に入るなんて、入ることに全く意味が無い」

水島「うん」

用田「ところが中国は短期決戦ですよ。例えば日本は何ですか。海空劣勢の中で短期決戦をしなきゃいけない。だから方策があるというのは、ちゃんと見れば、こういうことですよっていうことで、短期決戦なんです」

水島「うん」

用田「だって日本の国土はウクライナみたいに広い領土がありませんから、飯は無くなる。弾は無くなる。交通は無くなる。あっと言う間ですよ。残念ながら日本は長期戦が出来ません」

水島「うん」

用田「話が長くなりましたが、四番目は、防衛省は今回、６０兆円を要求した」

水島「うん」

用田「財務省は３５兆円、そして４３兆円という政治のバナナの叩き売りをした。意味が無いですよ。私は財務省に３５兆円の防衛計画を見せてくれと」

水島「うん」

用田「見せてくれと。そして、それで比較しようよと」

水島「うん」

用田「６０兆円の中には何がある。防衛省の大元の中に入っているかと言うと、付け回しがあるんです。ツケが」

水島「あぁ…」

用田「飛び出した部分が」

水島「うん」

用田「例えば、それを２年でつくるのは弐石とか言うんですね。弐石とは何かっていったら１年目に戦車の車体を造って、砲塔を１年目、使う。だから戦車のラインなんて無いですよ」

水島「うーん」

用田「まぁ、長くなってあれですが…」

水島「いやいや、大事な話ですから」

用田「これは前に一回お見せした、３正面というドギツイ画ですけどもね」

水島「はい」

用田「だから、今、ここの南西諸島だけを一生懸命、やる。これはいいですよ。一生懸命、頑張ろうと。これを、この黄色の線のように、ぐっと延ばさなきゃ駄目です」

水島「うん」

用田「今は日本全体を覆わなきゃ駄目なんです」

水島「うん」

用田「だから計画が１５年遅れだって言うんです。北海道なんか来やせんとか北海道は取られないとか。自衛隊が居なくなるんですから、空っぽになれば一個連隊でも上がってくれば、北海道の特殊部隊が上がって来れば、それで終わりですよ」

水島「はい、簡単にやられちゃいますよね」

用田「そうしたら、逆に言うと日本は拘束をされて南西諸島に部隊を送れないってことです」

水島「うん、うん」

用田「それは矢野さんが一番、ご存じのようにオホーツク海には核潜水艦が沈んでいる」

水島「うん」

用田「物凄く大切な所です。だから、これがあるからプーチンは安倍さんに、北海道の防衛をどうするんだと言った時に、いや、それはアメリカが入って来ることは止められませんと。だから日米地位協定を変えて国家主権を取り戻さないと、国の防衛は出来ないということですね。

じゃあ、その防衛隊はどうなっているかっていうと、日本の選択は短期決戦しかないです。日本の抑止・対処は、対中国と言うのは局地戦ですから、アメリカみたいに全世界で戦おうなどと思っていない訳ですよ。情報も取れますし、それで局地的に中国艦隊を封印すると。

これは前から申し上げている様に。第一列島線っていうのは非常に大きな役割を果たす訳です。列島線、日本列島ですね。日本列島自体があるから、中国はオーシャン・ネイビーになれないと言っているんですよ。だから、必ず南西諸島、台湾だけじゃなくて、南西諸島を取りに来るんです。自分達の好きな所を。だから、小さな台湾だとかロックオンしていること自体、実におかしな話ですよ。日本が一番、危ないんです」

水島「そうですね」

用田「これは決戦ですよ。短期決戦です。最終的には核、ＥＭＰを含んだ決戦をすると。この決意を持って差し違えの覚悟を見せない限り、絶対に日本は守れないと」

水島「そうですね」

用田「だから政治家が差し違えの覚悟を持っていないです」

水島「うん」

用田「だから差し違えが無ければ、所謂、武士道じゃありませんけども荒谷君の話じゃないけども、武士道の精神がなければ、所謂、この段に至っては自分だけきれいに生き残ろうっていうのは無理です」

水島「うん」

用田「この差し違えの決意と、ちゃんとした道具を見せた時に、相手は引くかもしれないということですね」

水島「うん」

用田「対潜水艦戦っていうのは、こうなっていましてね、非常に大切なのは潜水艦だけじゃなくて、潜水艦と潜水艦だけが戦うんじゃなくて、Ｐ３Ｃという、まぁ、Ｐ－１、今、Ｐ－１っていう、Ｐ３Ｃって上からと下からと両方でやって潜水艦を追い込むんですよ。このＰ３Ｃっていうのが悠々と飛べるのは第一列島線という聖域、カバーがあるからですよ。これは、もう大元の考え方で、だから陸上自衛隊に有難うと言って空を飛べと言いたい訳ですよね」

水島「うんうん」

用田「船を沈めるというやつも陸上自衛隊のもっている対艦ミサイル」

水島「うん」

用田「それから、所謂、中距離のミサイルを、やがて持つようになるでしょう。海上自衛隊は護衛艦に持っているやつじゃなくて、ミサイル艇を持っているやつで、数は少ないけども、これは使える訳ですね」

水島「うん」

用田「それから航空自衛隊。Ｆ－２は、これをもっている訳ですよ。だから陸海空は立体的にやる演習を１５年前から始めたんです」

水島「うんうん」

用田「これはアメリカが遅れて、最近５年ぐらい陸軍と海兵隊に、そういう対艦ミサイル、防空ミサイル、歩兵を束ねた部隊のグループを創った訳ですよね」

水島「うん」

用田「だから、これは日本が先行していて、この対艦ミサイルは国産ですよ」

水島「うん」

用田「ここを、よく頭に入れて置いて貰いたいんですね。トマホークはアメリカのものです。ボロミサイルだと。あんなの要らないですけどね」

水島「うん。そうですね」

用田「でも、それには、ちゃんと狙いがあって、この前、申し上げたように、指揮権をとると。指揮権を取る為ですよ。これがその総合的な画で、これは、あとで、しっかり見て戴ければと思いますけども、防御とか攻撃とか言っていますけども、南西諸島にかけてずっとバリヤーを造る訳ですね。

対艦ミサイルと防空ミサイル、これからの対艦ミサイルは千キロ飛びますから。これはミサイルと防空ミサイルと、それから地上部隊が居る。しっかり守っているから、その間に太平洋側を伝って兵站が生きている訳です。国民を逃がすことが出来る訳です。潜水艦は、これ、金魚みたいに下に潜っていると、大変な手間がかかっている画ですけど、まぁ、これで居る

から基本的に対潜水艦戦が出来る。やっぱり列島線があって、そこが障害になっているので中国も中々そこを突破出来ない訳ですね。でも、それを突破すると太平洋に入ってしまう」

水島「はい」

用田「そうすると、我々も攻撃型原子力潜水艦が要るんですよ」

水島「うん、うん」

用田「絶対に要るんです。アメリカを頼らないで。こういう下で艦隊を撃滅することが出来る。前も申し上げたように千キロだと中国本土まで届きますから、基本的に東シナ海、南シナ海で封じ込めれば、これを撃滅することが出来るし、その弾頭を核に替えることは出来る訳です」

水島「うん」

用田「それは威力が限定されるかもしれないけども、電磁波を出すＥＭＰだとか、艦艇も広い範囲で無力化することが出来る」

水島「うんうん」

用田「そして通信衛星ですね」

水島「はい」

用田「これも破壊することが出来るんですよ。衛星通信。それと基本的に中国は、もう身動きがとれない」

水島「うん」

用田「だから、この２月、アメリカではサリバンが騒いだ訳です。アメリカは騒いだ訳ですよ」

水島「うんうん」

用田「宇宙に対して核というものの配備は、どうのこうのと言ったやつは、核だとかレーザーだとか、こういうものは、ずぅっと中国が前からやっていますから」

水島「うん」

用田「北朝鮮なんて、あぁ、間違っていたら、あとで矢野さんに糺して貰いたいんですけど、２発か４発の衛星みたいなミサイルは、もう、アメリカ本土の上空を今、回っていると」

水島「なるほど」

用田「それは、ある時期にバァ～ンッと破裂すると、電磁波攻撃が出来ると」

水島「なるほどねぇ」

用田「これは間違っていたら、ごめんなさい。正しいかどうか知りませんが。そういうことも書いてありました。いずれにせよ、みんな、そこを恐れている訳ですよ」

水島「うん」

用田「で、これは、この前もお見せしたけども、２０１７年の、アメリカのＥＭＰ委員会で議会報告があった、上空でパンッと破裂させると、所謂、空母とか、そういうやつを送ったって電磁波的に無力化されますよ」

水島「無力化される」

用田「艦艇は弱いんですよ」

水島「う～ん」

用田「艦艇は電波吸収体ですから」

水島「なるほど」

用田「吸収体の塊ですから」

水島「うん。はいはい」

用田「だから、我々もそれは狙い目です。だから核を使うと、基本的にパンッとやれるっていうことは、日本もこういう電磁波弾を持つと衛星通信もやれるし、中国艦隊も広い範囲で殲滅ができる。或いは、地上に対して、それは無力化と言うか、地上の無力化ということになると。当然、それは大きな核兵器という大きなバックアップが無きゃ駄目ですよね。所謂、この威力限定」

水島「はい」

用田「ただ何処の時点で中国がギブアップするか分かりませんから、効果的なものは持つべきだろうということになるんだろうと思うんです」

水島「なるほどね」

用田「二番目で申し訳ありませんが、国家主権の根幹は外交・防衛における生殺与奪の権。もう、ここに集約する」

水島「そうですね」

用**田**「ここをねぇ、さっき言った自衛隊を国防軍にしなくていいと言う人達、生殺与奪の権を使えない状態にしていて、それが国家主権ですかと」

水島「うん」

用田「国家主権を放棄しているんですよ」

水島「そうなんですよ」

用田「トランプも自助努力しない者は救いませんし、バイデンは自助努力を必要ないと、服従しろということですね」

水島「うん」

用田「代理戦争の話になると、日本に於ける欧米の代理戦争の醜い姿っていうことで、バイデン政権は日本を生かさず殺さずで、日本を中国に売り渡すか滅亡させると」

水島「うん」

用田「これは長くなるのでペーパーを見せませんけども、ウクライナ戦争で暴かれたのは、ブリンケンとキャメロンが言っている欧米は人的な損失を出さずにロシア軍の能力を半減させた」

水島「うん」

用田「これはアメリカの安全保障に対する投資だと。それからブリンケンは９０％がアメリカの製造メーカーに費やされている多くの雇用を生み出したと」

水島「そうですね」

用田「エコノミストの編集長は、ウクライナ支援というものは最も安価な方法だ。殺されているのはウクライナ人だと」

水島「そういうことですね」

用田「これは正しいかどうかは、私は裏がとれていませんが、でも書いてあったことを言うと、キャメロンは『ロシアに対する代理戦争で多数のウクライナ人を失ったことになったことは、金に見合う良い価値だ。ウクライナ人は安っぽい商品だ』」

水島「もう一回、言って下さい。それって凄い話ですよ」

用田「裏がとれていない部分があるかもしれないので」

水島「キャメロンっていう…」

用田「そうです。キャメロンです。キャメロンは、あちこちで、そういう話をしています」

水島「あぁ、そうですか」

用田「しています」

水島「あぁ」

用田「でも同じことですよ。死んでいるのはウクライナ人だとか」

水島「まぁ、そうですよね」

用田「ウクライナ人は安上がりな安全保障だと。その裏に、これがあっても、おかしくないし、死ぬのは日本人だと」

水島「うん。だから同じですよね」

用田「同じです」

水島「はい」

用田「死んでも平気だと。それは安全保障の安上がりだということで、バイデン政権が曰く、これは代理戦争。日本人は、これをよく頭に入れて肝に銘じておかなきゃいけないと思うのは３つ、まぁ、１、２、３、とありますが２と３は一緒です。中国とは共存が前提で、競争が紛争にならないようにガードレールをつくり本格戦争はしないと。

今回、経済制裁しましたよね。あれが制裁ですか。アメリカは、中国の電気自動車は一台も入れてないんですね。殆ど入れていない」

水島「うん」

用田「鉄鋼なんて５．６％ぐらいしかない」

水島「うん」

用田「そんなものに制裁って、やりましたって言うのは、正にガードレールをつくって紛争していないように、お互いにやったふりしようと。出来レースですよ。プロレスと言ったら、プロレスに失礼だけども…」

水島「全くそうですね」

用田「まぁ、所謂、出来レース。２番目、３番目は一緒ですが、これはロシアも敵として、日本には３正面作戦を強要して、アメリカの防波堤になれ、防波堤になるっていうことを、はっきり言っていますから」

水島「うん」

用田「日本人は３正面作戦をやれと。日本なんか、どうでもいいんだと」

水島「うん」

用田「基本的にロシアと日本は絶対に組ませないぞと」

水島「うん」

用田「そういう思いもあるでしょうし、日本は潰れても平気だということで、そういう大規模戦争へ拡大するというのが色んなやり方で狙いですね。で、アメリカは核戦争をやらない。核抑止も存在しないと」

水島「うん」

用田「そして四番目。自らは戦わずに代理戦争で長期戦へ導入と。今のウクライナを見て下さい。長期戦でしょ」

水島「そうですね」

用田「引き摺るだけ引き摺るでしょ。ギブアップしませんね。もうギブアップですよ」

水島「うん、うん」

用田「この為に日本には決戦をさせない。先制攻撃もさせない。ウクライナを見たら、よく判るでしょ」

水島「うん」

用田「去年、決戦はさせないですよ」

水島「うん」

用田「肝心な時期には動かない。ウクライナは今、ハリコフには、当面、使える部隊をあて

がっているんですね」

水島「うん」

用田「そしてバクムートだとかアウデューカで戦ってボロボロになった。これを練度の高い部隊だと言って、だけどボロボロになった部隊を懲罰みたいにして送っている」

水島「ハリコフの方にですか」

用田「ハリコフの方に」

水島「はい」

用田「要は、もう手持ちがない訳ですよ」

水島「うん」

用田「ブタノフは、予備がないと言っていますけども、これが本当なら戦は本当に収束に向かっているはずですけどね」

水島「まぁ、そうですね」

用田「やめないんですよ。長期戦。儲かる迄、儲けようと」

水島「うん」

用田「じゃあ、その時、日本はどうするのかと言うと簡単ですよ。生殺与奪権を日本が独自に持つということで、日米同盟の中核は中共を打倒することと拡張主義。所謂、ＮＡＴＯの拡大みたいなことをさせないと。法の支配だったら中国に言えと」

水島「うん」

用田「アメリカの代理戦争や習を倒せというのがバイデンですけどもね。同盟は断固として拒絶する。そういう同盟は同盟じゃないということを、だから日米同盟をもう一回、結び直さないといかんです」

水島「うん」

用田「二番目は、日本の独自外交を推進して３正面作戦等の大規模戦争を断固として回避すると」

水島「うん」

用田「これは申し上げた通り、まず米露は協調しろと。やるかどうかは別として協調しろと。それが世の中、世界の為だろうと。それから日露協調ですね。これは日米地位協定を見直さなきゃ駄目ですね」

水島「うん」

用田「ロシアに北朝鮮の抑止を、まぁ、依頼っていう表現は悪いかもしれませんけど、一緒に抑えてねと。独自核保有をして核の脅しには屈せずと。この３本柱で行かないと、大規模戦争の回避は出来ないと」

水島「うん」

用田「だから方策はある。日本がやるかやらないか。日本が外交上、指導権を執るか執らないか。これだけです」

水島「本当にそうですね」

用田「三番目は、長期戦に引き込まれない。これは短期決戦、先程、申し上げたように、私は短期決戦だと思うし、その為には先制攻撃っていうものを留保しておかなきゃいかん。やるかやらんか分からないけども、先制攻撃をやるかもねと。

中国艦隊は、先程、申し上げた様に封印して局地戦で殲滅すると。そして最後、決戦の時にはアメリカの指揮系統を遮断して日本単独で決心をすると。この指揮権について、ちょっとだけ、お話をさせて戴きます。代理戦争で自衛隊を米軍の統制下におく為には、３つの方法がありましてね。装備、弾薬は米依存させる。今、もう完全にそうなっていますね」

水島「そうですね」

用田「ウクライナがそうですよ。そうなると装備が縛られて、弾を縛られたら、それで戦争は出来ないですよ」

水島「うん、うん」

用田「情報の優越・コントロール。これは、もう、どうしようもない。でも日本は、どうしようもなくないんですよ。局地戦ですから掴める訳です。その手段はあります。沢山の情報はいらない。ＥＭＰ弾みたいなのがあれば、アバウトな情報でいいんです。そこに居そうだなっていう所にバンッとやればいいんです。それから米軍による自衛隊の実質統制、これが作戦統制ということになる訳ですね。これは長くなるので、もし聞かれれば、あとで話します」

水島「うん」

用田「これはＭＣＶっていって日本独自で造ったやつですね。１０５ミリのガンを積んで、タイヤで走るんですよ」

水島「うん」

用田「こういって色んなバリエーションをつくろうとしている訳ですね。一番、簡単なのは、この下だけを使って装甲車にすること。それを頭において造ったものです。エンジンを前に置いたりしてね。ところが、これが何、入札したと、落としたのがフィンランド」

水島「あぁ、そうですか。えっ、何、フィンランド？」

用田「フィンランドです」

水島「おぉ～」

用田「ＮＡＴＯ仕様ですよ」

水島「あぁ、なるほどねぇ～（溜息）」

用田「結局、最後の砦は陸上自衛隊ですよ。対艦ミサイルもＳＳＭは国産です」

水島「うん」

用田「だから、その前にトマホークを売って先手を打ったんですよ」

水島「なるほど、うぅぅむぅ…」

用田「それは何のことは無い。あのクソ弾って言ってボロ弾じゃなくて、指揮統制権ですよ。だから、それは、ですねぇ、これは…」

水島「それで指揮統制権か、なるほど」

用田「日本の統合司令部創設というのは、アメリカが日本を統制に入れたい。ＮＡＴＯだとか在韓米軍みたいに、ですね。実質、こう言ったら失礼かもしれんけども、海空自衛隊はもうアメリカの統制下に入っていると言わざるを得ない」

水島「うん」

用田「トマホークの敵地攻撃。一生懸命、自民党が頑張った敵基地攻撃は、既にアメリカ海軍が指揮統制をします。この前、演習をしました。エマニュエルが見に行きました」

水島「うん」

用田「だからお前達には指揮統制、単独で敵地攻撃すらさせないと」

水島「あぁ、なるほどね、そうですね」

用田「航空自衛隊は横田で一緒に共存しています。同じ駐屯地で」

水島「うん」

用田「だから完全に指揮統制下に入っているという風に見てもおかしくはない」

水島「海空は、そうだっていうことね、はい」

用田「陸の対艦ミサイルだけは、俺は嫌だと言ったら外せる可能性はあります」

水島「なるほどね」

用田「だから対艦ミサイルについては可能性がある訳です。だから、それは切り離して、核ミサイルを装着するっていうことも、そこに意義がある訳です。戦術核をそこに積むっていう話を、勿論、ＳＳＢＮ、核発射のミサイルを積んだ潜水艦を単独で造らなきゃいかんですけどね。そういうやつは必要です。だから今、横田の権限強化とアメリカのインド太平洋軍の派遣統合軍司令官という話だけが今、走っていますね」

水島「うん」

用田「これは表だった話です。これは何だかんだつくったって統合司令官だとか統幕長なんていうのは外圧で抑えられます。残念ながら岸田君が、はい、はいって言ったら、そうなっちゃうんです。だって最高指揮官は岸田君ですから」

水島「うん」

用田「いや、核の話があるんですけども、最後に解決できないのは誰が核の引き金を持つの

と言ったら…」

水島「うん。岸田君です」

室伏「岸田君ですか」

水島「(失笑)」

用田「笑っちゃいますけどね。国家主権なき作戦統制で指揮を剥奪されると。こういうことですね。本当は、ここにインド太平洋軍が居てアメリカ軍が居て、指揮統制をする。統合軍司令官が居て、自衛隊が陸海軍自衛隊の統制をする。これが完全ないい姿ですね。お互いの指揮官同士が共同する、部隊同士が共同する。これが本来の姿ですね。ところが今、やろうとしているのは、これに跨る統合調整所を創ろうとしている訳です」

水島「うん」

用田「これはお互いに協力する為には、残念ながら、やはり必要ですね。そしてアメリカの特別任務部隊指揮官、要するに東北の大震災の時には太平洋艦隊司令官、フォースター大将ですね。これは統合司令官の大将だし、統幕長の大将だし、インド太平洋軍も大将ですね」

水島「うん」

用田「ところが、その下に大将が４人居るんですよ」

水島「うん」

用田「アメリカは物凄いインフレですので、ね」

水島「なるほど」

用田「それが送って来る訳ですよ。これがアメリカ軍の指揮をするんです、アメリカ軍を」

水島「うん」

用田「これが本来の姿ですね。ところが統合調整所と米特別任務部隊指揮官が出来ると、作戦統制っていう言葉が出て来るんです。作戦統制。これは指揮でも何でもないけど、英語に直すとコントロールじゃなくてコマンドです。実質、指揮ですよ」

水島「うん」

用田「この画というのは、からくりがこれだろうと、私は想像しています。指揮権密約は、作戦統制として生き返ったということですね。それは吉田茂とアメリカの大使、極東軍司令官との指揮権密約、１９５２年と１９５４年にあるということです。有事の際は単一の指揮官が不可欠で、現状ではその司令官はアメリカが任命すべきであることに吉田茂は同意している訳です。

そして、そのあと日米ガイドライン。このガイドラインを作る時に、日本側は日本の防衛を主体的にやるとか色々書いてありますけども、少し解り辛いんですけど日米ガイドライン。『自衛隊及び米軍は、それぞれの指揮系統に従って行動』これは良さそうですね。『整合のとれた作戦を共同して実施できるよう、あらかじめ調整された作戦運用の手続きに従って行動する』解らんでしょ」

水島「うん」

用田「『あらかじめ調整された作戦運用の手続きに従って行動する』というのは、原文がどうなっているかと言うと、大元は、ただ、これじゃあ、拙いって言うんで書き直したんですよ。原文は『必要な際に双方の合意の下、いずれかが作戦を統制する権限を与えられる』」

水島「これじゃあねぇ、全然、違うじゃないですか」

用田「イコール作戦統制、瓶の蓋です」

水島「そういうことだねぇ」

用田「だから、これは統制する権限が与えられたのは当然、あらかじめ調整、作戦の為に色々、この調整所を通じてというのは普通だけども、ケース・スタディをする訳ですよ。こういう場合、こういう場合というようにね」

水島「うん」

用田「日本が艦隊を撃滅する場合。中国本土に攻撃する場合、こうした場合という場合が出て来る訳ですよ」

水島「うん」

用田「じゃあ、その時にどっちがいいんだいと。どっちがいいんだいとなる訳ですよ」

水島「そうだね」。

用田「ここは、我々外から見ることは出来ません。でも彼らの考えているのは、一度、その轍を踏んでいる以上、作戦統制とか運用統制ということで、統制されることになる可能性は極めて強いと」

水島「そうですね」

用田「私は罪深い首相の答弁と」

水島「うん」

用田「ほじくり返してみたんです、Ｋ首相。名前、知らないんでＫ首相ですが。アメリカの『事実上』の指揮統制の下に自衛隊が置かれることは無い。『事実上』って要らないでしょ」

水島「うん…」

用田「本当は有・平時共に米軍の下に置かれる事は無いと書かなきゃいかんでしょ」

水島「うん」

用田「彼の場合は、米軍の事実上の指揮統制の下に自衛隊が置かれる事は無い」

水島「違いますね、それ」

用田「違います」

水島「うん」

用田「違うんです。これは気を付けて見てないと、こうやって分析しないと分からない」

水島「そう、そうですね」

用田「その中に作戦統制っていうのが、これは制服の、我々が覗けない、そういう調整の中で出て来るし、ここに当然、統幕長は総理を補佐する訳ですよ」

水島「うん」

用田「だから、その上に何とか大使が乗っかっているでしょ。これが、あぁせいって言う訳ですよ」

水島「総督がね」

用田「こうせいと総督が。そして、まぁ、言うと現役がしっぺ返し食らうので、あまり言いたくないけども、外務省とか、まぁ、内局というところがある訳ですね」

水島「うん」

用田「まぁ…ですね。こういうところは、君、こうした方がいいんじゃないと、こういう風に言うんじゃないかなぁっていう心配をしております。あと二つだけです、すみません」

水島「そっちの方が、力あるんでしょ」

用田「はい？」

水島「そういう意味での、こういう時は大体…」

用田「いや、人事権を持っていますから」

水島「うん、そうですよね」

用田「任命権を持っていますから」

水島「そうですね」

用田「未だにそうですから」

水島「うんうん」

用田「文句、言う奴は飛ばされ…いや、もう、やめよう」

水島「はい、そうですね。そういう話です」

用田「だから、あぁ、そこまでやるのと思うけども、また待ってよ、アメリカ、お前は、何じゃと（失笑）。米中共存でアメリカは中国と戦わないと言っているんじゃない」

水島「うん」

用田「アメリカ空軍は日本に存在していません」

水島「うん」

用田「陸軍海兵隊も日本に展開しません」

水島「はい」

用田「この前、インド太平洋軍の陸軍司令官が日本に来たのかな」

水島「うん」

用田「中距離の弾道ミサイルを太平洋に配置すると言ったんですよ」

水島「日本じゃないんですよね」

用田「日本じゃないです」

水島「はい」

用田「もう初めから日本には配置しないと言っている訳ですから、配置しないですよ」

水島「うん、言っていましたよね」

用田「だったらフィリピンに配置しろと言っているんです。お前らの責任だろうと。彼らはグアムと西海岸だけにしか置かないんです。あとオーストラリアと。だから意味、無いです。尺で届かないから。アメリカ海軍も当然、接近、出来ませんよねぇ。接近阻止」

水島「うん」

用田「緒戦に於いて米軍はＡＵＫＵＳのラインに避退をするでしょうと。中国本土を攻撃せず、核の傘も無いというのに、何故、日本をコントロールしたいの。この二つです」

水島「うん」

用田「これは在日海兵隊司令官、スタックポールが１９９０年３月に言った『瓶の蓋』」

水島「うん」

用田「もし米軍が撤退したら、日本は既に軍事力を更に強化するだろう。誰も日本の再軍備を望んでいない。だから我々は瓶の蓋なのだと」

水島「うん」

用田「それから伊藤貫さんに教えて戴いたディフェンス・プラニング・ガイダンスの９２年」

水島「うん」

用田「日本は自国の利益だけでなく、同盟国や友好国の利益を脅かし、国際関係を、深刻に不安定化しかねない過ちを背負った、敵対国の日本には自主防衛力を持たせない」

水島「うん」

用田「これに行き着く訳ですよ」

水島「うん」

用田「今、やっていることは」

水島「そうですね」

用田「ちょっとした指揮統制権って言いながら、ちょっとした工夫で瓶の蓋が強化されている訳ですよ」

水島「そうですね」

用田「我々の悲願だった統合司令化が出来る。これは、やらないかん」

水島「うん」

用田「でも、統合調整所は出来るだろう。でも、その時に大切なのは、自衛官とか政治家が、決戦の場面で日本が決心して行動するということを、自分達の生殺与奪権は自分達が持つと。だから、私が最初に言った様に、その時にはアメリカの指揮統制権を遮断する」

水島「うん」

用田「日本は決心をする。この覚悟があって、それが出来れば中国本土に対する攻撃、核ですね、この脅しに屈しないという。核に対する抑止、ＥＭＰも含めて」

水島「うん」

用田「だから艦隊を撃滅する、ＥＭＰを含めてミサイルなんかで撃滅すると。これは日本にとっての大きな手札ですね」

水島「うん」

用田「これは最後ですけれども、指揮権を含めて日米地位協定の裁判権、アメリカ軍が国土全体を自由に使用するという基地使用権の国家主権を持つ国家として、断固として、同時に解決すべきじゃないといけないと。今回、一緒に抱き合わせじゃなければ、基本的にこういう指揮権の統制のことはやっちゃいけないっていうことです」

水島「そうですね」

用田「だから、これは、もう改めて言いませんけれども、平時は、これで日本に核を持たせない。核攻撃、あぁ、ケース・スタディはいいから、いいから。アメリカがやるから、これ、ブラックボックスでいいよと」

水島「うん」

用田「何も出来ないじゃないですか」

水島「そういうことですね」

用田「そこから鍵をかけられる訳ですよ。自主防衛をさせない」

水島「うん」

用田「我々は、あの代理戦争の駒として、しっかりと取りに行くけども、日米豪、ＡＵＫＵＳなんかの技術は、しっかり戴くけれども…」

水島「ＡＵＫＵＳに入れないしね、はい」

用田「お前達には原子力潜水艦の技術を渡さないという明確な意思表示ですね」

水島「そうですね」

用田「前方展開戦略に戻れと言いたいんですけどね、だから中露に対して日本が接近することを、絶対に阻止するのは、裏にあるでしょう」

水島「そうですね」

用田「そんなのやってやるかと、こういう世界ですけどね（苦笑）。中国本土、それから独自の短期決戦。艦隊撃滅。米中は直接、戦争をしないっていうことに口出しをさせないと」

水島「うん」

用田「尖閣は、どうぞ、お好きなようにやってみたらと、こういう世界で、長くなって申し訳ありませんが、いつもながら、こういうことで、ずぅっと我々の防衛力っていうのは今回、更に輪をかけて抑え込まれると」

水島「そういうことですねぇ」

用田「このからくりを知らないと、基本的には戦えないですよ」

水島「本当に明確に暗い気持ちになりましたけども、もう一つ、これは新聞でも報道されたけど、ＣＳＩＳがやっていた、まぁ、あれじゃないですか、中国と戦ったら一晩で海上自衛隊は撃滅されると。航空自衛隊の飛行機も全部、やられちゃうと。それでも戦うっていうのが出ていましてね。前に番組で紹介したんだけど、あのＣＳＩＳの日本の自衛隊の戦力評価というね、中国と今、戦ったら、こうなっちゃうよというのは、どう思われますか」

用田「それは基本的に把握している数でやっているだけの話じゃないですか」

水島「あぁ、そうですか」

用田「だから、それは、先程申し上げたように、封じ込まれているのは中国艦隊ですから、弱みを持っているのは」

水島「うん」

用田「これは基本的に陸海空、だから海海、空空の話じゃないです」

水島「うん」

用田「我々は陸海空の統合した、潜水艦も含めて船を沈める戦略、これをもって基本的に叩こうとしている訳ですから」

水島「うん」

用田「それを、どっちが先手を打つかっていう話になって来る」

水島「なるほどね」

用田「もうひとつは核の脅しがあるでしょ」

水島「勿論、そうです」

用田「だから、核の脅しで手が出ない日本は何も出来ないということです」

水島「うん」

用田「今、ずるずる申し上げたように、手が出ない体制の下に、それは全部、組み込まれてしまっている訳ですから、そのＣＳＩＳも好きなようにやるんじゃないですか」

水島「うん」

用田「だから、それは海空を増やせって言うんでしょ」

水島「うん」

用田「しかし、それは、海洋優勢、航空優勢はありませんと言っとる訳ですよ。アメリカ海軍も空軍もそこに留まらないでしょって」

水島「うん。居ないですよね。はい」

用田「全く崩壊していますよね、ロジックが」

水島「どうしようもないっていう感じがするんでね（苦笑）、はい。極めて明確過ぎるぐらい大事な話だったと思います」

用田「自衛隊の話ですから、ちょっと長く話しましたが」

水島「皆さん、これはアーカイブで、ずっと出ていますから、大事なところを繰り返し聞き直して戴きたいと思いますね。では、矢野さん、お願いします」

矢野「『本当に自衛隊は戦うのか、戦えるのか』というのが今日のテーマですけれども、まず、敵は何かということを明確にするということが一つと。何の為に戦うのかと。何を守るのかということを明確にすると」

水島「うん」

矢野「それが大前提だと思うんですね」

水島「うん」

矢野「その後に、どう戦うかということがある訳ですけれども、まず誰が敵なのかということについて言えば、私は、もうはっきりグローバリストだと」

水島「うん」

矢野「これはアメリカにとってもロシアにとっても日本にとっても、共通の敵です」

水島「うん」

矢野「共産主義は、その一派に過ぎない。今のバイデン政権を牛耳っているのはグローバリズムです」

水島「そうですよね」

矢野「アメリカという国家を破壊しようと意図的にやっている。それが敵の正体だと。だから我々は、そういう点ではアメリカの中のナショナリスト、本当の愛国者で、本当にアメリカの憲法の建国精神に基づいて本来の自由や民主主義というものを守ろうとしている、そう

いう人達とも連帯すべきだし、それからロシア。これは、ソビエトの殺伐とした共産主義を経験し、その中から出てきた政権であって、今のプーチン大統領は、そこで支配されたロシアの利権をグローバリストから取り返した人間です。それを、もう一度、奪還すると。ロシアを疲弊させるというのが今のグローバリスト、バイデン政権を後押ししているニューヨークの悪徳資本家の大金持ちとか軍複合体とか、そういった連中のユダヤ勢力が主ですけども、彼らの思惑ですよ」

水島「そうですね」

矢野「その手先がヌーランドだった。ブリンケンもそうですし、今の国務省、それから司法省からＦＢＩ」

水島「うん」

矢野「ＣＩＡも全部、牛耳られて、軍の中まで、今はＬＧＢＴの問題とか、さっき出た様に、どんどん弱体化が進んでいると」

水島「そうですね」

矢野「その余波が日本まで来ていて、もう完全にメディアも勿論、教育界も何処からもそうですけどもコントロールされていますし、それが今の大使が来てから、更に締め付けが強くなっている」

水島「そうですね」

矢野「今では、もう暗殺も辞さない、テロもやるというような手段を選ばない方法まで来ていると。今のまま行くと、私は、アメリカ大統領選挙は、そんなに楽観できないと」

水島「うん」

矢野「トランプ候補が本当に生き残れるか、勝てるか分かりません。そういう状況の中で、最初、モーガンさんもご指摘されたように、これから益々不安定になって本当に危険な状態になると思います。結局、何かっていうことは、我々は横に連帯できるグローバルな勢力も居るということを、まず自覚すべきだということが一つですね。

それから何を守るのかっていうことについて言えば、やはり日本の国体、国柄の本質は皇統にある訳ですから、皇統を何としても守らなきゃいけない。そういう点で、今、その中核を狙い撃ちにした、さっき、水島社長が言われたようなキャンペーン」

水島「そうですね、はい」

矢野「それから警備体制の問題ですね」

水島「うん」

矢野「こういうことを、やはり日本としては国を挙げて、きちっと態勢を執るべきだと」

水島「そうですね」

矢野「安倍さんの暗殺があったにも拘らず未だにこういう為体だということで、日本としては早急に警備体制を強化する、それから公安機能、それからスパイ防止法の経済安保を通りましたけども、未だ未だ不充分です。こういうスパイ防止、それから色んな浸透工作、対処

とか国境管理。今、移民をどんどん入れるなんて馬鹿なことをやっていますけども全く逆だと」

水島「うん」

矢野「もうアメリカ、欧州で完全に失敗したことを今、後追いになってやっている訳です。ＬＧＢＴも然りで」

水島「はい」

矢野「こういう愚かな政策、欧米追随は、もうやめろと」

水島「うん」

矢野「日本の国柄を、しっかり守る体制にすべきだと。何を守るかっていうのは日本の国柄を守る事だと。国体を守ることだということですね。では戦えるのかってことについては、これは自衛隊の能力に関わる問題です。私は用田さんが言われたことには殆ど賛成なんですけれども、今、幕末史から明治建軍のことを調べているんですが、明治時代以降、日本は、徴兵制を布いて来た訳ですね。徴兵制を推進した中心は大村益次郎と、それを継いだ山縣有朋ですね。

これが日本陸軍の建軍の父ですけれども、彼らが何故、徴兵制っていうことを言ったかというと、どちらも長州征伐、それから馬関戦争を経験して、それで、欧米列強の軍事的実力というものを知っていると」

水島「うん」

矢野「それから、最終的には非常に重要ですが幕臣の藩屏と言われる、これは正兵と言う、正しい兵隊、正規軍ですけども役に立たないと」

水島「うん」

矢野「そうじゃなくて、騎兵。これは高杉晋作がつくりましたけども、騎兵隊っていうのを創ったんですが、それは意志のある人間は百姓でも神主でも誰でもいいと」

水島「戦えるというね」

矢野「とにかく武器を持って戦えと、集まれということで、それで長州戦争を戦い抜いて、それが明治の建軍の礎になった訳です。この騎兵隊こそ志のある者、本当の愛国者が武器を持って立ち上がれと。それを結集して組織化していく、ここに明治建軍の出発点があった訳ですね。我々は、もう一度、これを学ぶべきだと」

水島「うん」

矢野「日本は現在、国際世論調査で７７か国中、最低の武器を持って戦うという比率ですよ、１３．２％だって言われています。ダントツに低い」

水島「うん」

矢野「これ程、日本の国民の国防意識は低調です」

水島「うん」

矢野「憲法以下、先程からお話あるように主権を自ら放棄して、それを世界平和の為であるという自己欺瞞をやっている訳だ。こういうことは、もう通用しないっていうことは、皆、もう解っているんですけれども、既得権とか、特に敗戦利得者の連中が未だに、その遺産にしがみついているもんだから変わらないんですけども」

水島「そうですね」

矢野「この欺瞞というのは幕藩体制と同じで、いずれは外部からの脅威によって自壊しますよ。間違いなく。日本の国を抑える事なんかできません。その時に立ち上がるのは、正に草莽崛起じゃないですけども、この１３．２％の下地ですよ」

水島「うん」

矢野「これだけ反日教育をやられ、国家意識を創出され愛国心を否定された中で、まだまだ、逞しく生き残っている１割強の人達、この人達が団結して、正規軍じゃない本当の国民軍を再建する。そこまでやらなきゃ駄目だと私は思います。１３．２％ということは、１億２千５百万人居たら１千６百万人居るんです。ということはねぇ、その１割でいいですよ」

水島「うん、１００万人だね」

矢野「１割でいいから武器を持って戦うとなれば、１６０万の軍隊を創れるんです。日本には、それだけのマンパワーがあるんですよ。よく募集難だとか少子高齢化とか言って右下がりのやつを作って白書にも出ていますけど、あれは他の国の軍隊の水準から言うと贅沢極まりない。何もやっていないということの言い訳に過ぎないんです。日本の徴兵率は０．２４４％ですよ」

水島「うん」

矢野「海上保安庁は入りませんからね。あれは軍隊、軍事機能をしてはいけないことになっているので…」

水島「警察ですからね」

矢野「そうすると人口の０．２４４ですね。これは世界平均の三分の一以下ですよ。それだけの兵員でさえ集まらないっていうのは、いかに国が努力していないか。国民が協力していないか」

水島「うんうん」

矢野「国民自身にやる気が無いかということですよ。だったら本当にやる気のある１割強の人達を組織化して、そういう人達の力を吸収すべきだと。勿論、年寄りも居るし、女性も居る」

水島「はい」

矢野「或いは、身体障害者の方も居るかもしれない。だけど今の戦争は、何も若い人が小銃を持って敵陣地に突撃するというような戦争じゃないんです」

水島「うん」

矢野「さっきからお話があるようにドローンを使える、操縦が出来ればいい。それから色ん

なコンピュータをいじれればいい。語学が出来ればいい。医療だって法務だって、色んな専門分野があって、むしろ、そういう人達を必要としているんです。サイバーのオタクでもハッカーでもいいですよ、そういう人でも、本当に国の為、国防の為にやろうとしている人達を結集して、それを組織化して訓練しておけばいいんですよ」

水島「うん」

矢野「日本にはマンパワーがあるんですよ。だから、そういう体制を創れるかどうか、これは正に国民意志。国民の一部でいいですから、そういう人達の意志にかかっている、だから、もう徴兵なんかをやったって変なのが入って来るだけですから、やる気のある人達だけで、草の根の本当の国民軍をつくっていくという時代に来ています」

水島「そうですね」

矢野「もう一つの問題は今、用田さんからご指摘があったように日米関係をどうするかですけど、結論を言います。二つしかありません。日本は双務性をもって核武装をして日米対等で、もう一度、責任をもって自国の防衛、そして周辺地域の安定、秩序を守ると。アメリカに納得させるか、その代わり日本に核を持つ原潜を持つことを認めろと。韓国には黙認している訳でしょ」

水島「うん」

矢野「だから日本にだって認めない道理はないでしょ」

水島「うん」

矢野「これは国家差別じゃないですか」

水島「道理はないんだけどね」

矢野「えぇ」

水島「認めないんですよね」

矢野「やらせないっていうのは、それは国家差別であり日本民族に対する人種差別ですよ。民族差別ですよ」

水島「うんうん」

矢野「これを、どうして怒らないんですか。何故、瓶の蓋ですか。いつまでも、そんなことを許しておく理由なんか何も無いでしょ。それから二つ目に言えば、もし、それをアメリカが許さないと言うんであれば、日本は核武装を堂々とやればいい。その代わり、日米安保を破棄すべきだ。破棄して武装中立に移行すべきだと」

水島「うん」

矢野「真の国民軍をつくり、それを背景にして憲法を改正すべきです。明治の時もそうですけど、軍を再建し、軍人勅諭を作り、それから明治帝国憲法を制定しているんです。順序は、まず実力を持つこと。その次に軍隊を規律あるものにして団結する事。国民軍をつくって、その上で憲法を改正するんですよ。そうでなかったら、今のままでは真面な憲法なんて出来ませんよ」

水島「そういうことだね」

矢野「そういうことを、ちゃんと歴史から学ぶべきだ。先人はそれをやって来たんですよね」

水島「そうなんだよねぇ」

矢野「それの先人に対して、今の日本は、こんなことで顔向けできるのかと。子孫に対して責任を持てるのか」

水島「全くその通りだね」

矢野「私は最近、若い子と話していて、その人が本当に真剣に言ったんですけど、我々は、いざとなった時に武器を使うのに銃の撃ち方も習っていないと。こんなことで今後、何十年か、或いは１０年かもしれない、先に侵略を受けた時に、どうして我々の子供達や家族が守られるんだ。郷土を守れるんだと」

水島「うん」

矢野「どうして、こんな無防備な状態に我々を晒しておくんだと」

水島「うん」

矢野「何とかして下さいよと、真剣にそう言ったんですよ。それが若い人の本当の声ですよ。あの九条を守ったら何が平和ですか。いい加減にその自己欺瞞はやめろと。嘘つくのを止めろと。それが出来ないんだったら、はっきり自分達で力を持てばいい。日本にはそれだけのやる力がありますよ。やれるだけの力もあるし、何より責任があるんですよね。

原爆を落とされた時だって、亡くなった人の中には、この仇を討ってくれと泣いて亡くなった人が大勢、居るんですよ」

水島「それは、その通りですね」

矢野「何が『過ちを繰り返しません』ですか。ふざけたことを言うな。自己欺瞞や嘘を止めろと。これをメディアだって、はっきり懺悔すべきだし、本当は教育界も全部、入れ替えるべきですよ。教科書も全部、入れ替えるべきですよ。こんなことをしたら本当に日本は滅びますよ。私が言いたいのはそういうことです」

水島「誠に立派な、その通りのことを言って戴いたんですけど。実は私達が、この『くにもり衆』というのを創ったのは、そういう意味ですね。一種の国民軍の民間でやるしかない、まず種を蒔かなきゃいけない。おっしゃるように９９％か１００％の日本国民に、頑張れって言ったって、これだけの教育をされてきたから、本当に意識がある、子供達の未来を守りたいっていう意識がある人達がね、それから立ち上がるしかないっていうようなことを、やっぱり私もそう思いますね。

それと、もう一つ、私達が、このチャンネル桜を創設した時は、実は自民党の立党宣言だったんですね。自分で自主憲法を制定して、外国人の軍隊がこの国から居なくなった時でも、自分達の国を守れる状態をつくろうと。誠に立派な自民党の立党宣言ですよ。だから我々が元の自民党だっていうこと言ったのは、そこですね。これが普通の原点じゃないのと」

矢野「あのう、ただひとつ注釈をさせて戴きたいのは、保守合同する前の自由党の党是は何だったかと言うと、軍国主義の残滓を一掃するということだった」

水島「そう、そういうこと」

矢野「つまり反軍だったんです」

水島「そうなんだ」

矢野「それが吉田茂以下が、そういう方向を引いたんです」

水島「そうですね」

矢野「だから戦後日本は欺瞞体制です」

水島「そういうことになっているんですね」

矢野「従属を主体的に選んだんですよ」

水島「そうなんです。それもそう」

矢野「だから、未だに非核三原則だ、専守防衛だと言って、それを三文書で撤廃する事すら出来ないんですよ」

水島「だから、そういう意味で、例えばフィリピンを思い出したのはね、有名なスービックとクラークっていう米軍の基地が二つあった訳ですね。ピナツボ火山が噴火した時、いい悪いじゃないです。実際、失敗したんだけど、エストラーダっていう大統領が上院議員時代から米軍に出て行って下さいと。フィリピンは外国人の軍隊を基地に入れませんと。だから、その代わり中国に今の領土問題がやられるようになったんだけども、我々も、はっきり言えば、あと１０年とか１５年でアメリカが力も無くなって、大変だろうから、基地を置くことは難しいでしょうから、お出になって戴くようにする為に我々も頑張りますっていう提案が７０年間、本当に出ていないんですよ。

少なくとも３０年計画でね、米軍が居なくても我々が自分の力で守れるようになりましょうと。仲良くしましょうねって言いながらでも出来たはずなのに、発想が、もう全部、米軍に頼るというような形、奴隷根性っていうのかな、植民地根性で、こういうところに成り果てたんでね、今ねぇ、矢野さんが言った様に、私なんかも、やっぱり意識のある人が立ち上がるしかない。

戦争になったら逃げますっていうのが結構、沢山、居る訳ですよ。うちの討論に出た人も明確に言いました。僕はカタールへ逃げます。お金がありますからって（失笑）。平気でそういったんでビックリしたんですけどね。呆れるぐらい明らかに言ったのでね。でも、情けないと思っても、そういう人達も守れるような国にしなきゃいけないっていうかね。

まぁ、そういうことで今、お話し戴いたんですけど、今、用田さんがおっしゃったように、自衛隊員は戦う意欲はあるけれども戦えないということが現実だろうと。戦う意識のある人も居るけども戦えないというね。こういう状態の中で政治家なんて、まるで、そういうのが無いですからね。というようなことですけど、ここから議論を始めていきたいんですけど、伊藤さん」

伊藤「はい」

水島「今、皆さんのお話を伺ったんですけど、どうですか」

伊藤「はい」

水島「それを聞いた上でのコメントと言うか、一言、戴きたいんだけど」

伊藤「はい。短いコメントを３つだけ言います」

水島「はい」

伊藤「ひとつは去年の春ぐらいまで、ロシアは中国との同盟関係をどれぐらい深入りするかということに少しヘジテーション、戸惑いがあって、がっちりした本格的な同盟関係に入るまでにはいかないようなことを言うロシア人も結構、居たんですけれども、最近、中国もロシアも、これは本格的な同盟関係に入るしかないという風に腹を括ったような態度で、お互いに軍事協力とかして、それは勿論、アメリカがウクライナの戦争を短期で終わらせるつもりが無いということが判って来ましたから、これは、中露同盟を本格化せざるを得ないと」

水島「うん」

伊藤「軍事予算っていうのは、名目的な軍事予算ではなくて購買力平価で測ったPurchasing Power Parity<PPP>で測った、実質軍事予算で測った方が現実の戦争能力を測れるんですね」

水島「うん」

伊藤「ですから、例えばロシアの名目軍事予算と実質軍事予算というのは２．５倍ぐらいの差があるんですね」

水島「なるほど」

伊藤「中露同盟の実質軍事予算を比べると、これは、もうアメリカの実質軍事予算を凌駕しています」

水島「なるほどね」

伊藤「しかも中露の軍事予算の増加率の方が今後、アメリカの軍事予算の増加率よりも高いという風に予測されていますから、中露同盟の軍事予算の優位性は、どんどん高まっていく訳です」

水島「なるほど」

伊藤「そうすると、現在のアメリカが中露と同時に戦う、相手にして戦う能力が無いのは明らかですけれども、そのことは今から５年ぐらい経つと益々明らかになって来ると」

水島「なるほど」

伊藤「だから日本はアメリカに依存してきてますけれど、今から４年か５年経てば、もう、日本がアメリカに依存してきたのは間違い、大間違い、大失敗だったと、そういうことが間抜けな日本人も解るようになります。その点を一つ指摘させて戴きます」

水島「うん」

伊藤「もう一つは、最近、ミアシャイマーが言っていたことで、何て言ったかというと、アメリカと同盟関係に入ると碌なことが無いぞと」

水島「(笑)」

モーガン「それ、ほんとですか」

伊藤「ウクライナは２０１４年からアメリカと実質的な同盟関係に入って、ペンタゴンとＣＩＡのアドバイザーを何百人も受け入れて実質的なアメリカの同盟国化してきて、この戦争に引き摺り込まれて、アメリカは、この戦争を、なるべく長く続けたいと。ロシアにダメージを与える為に長期化したいと」

水島「はい」

伊藤「今、ウクライナ人がやることは、なるべく早く、今直ぐアメリカとの同盟関係を切ることだと」

水島「うん」

伊藤「このままだとウクライナ人は、アメリカに利用されて、利用されて、利用されてボロボロになるだけだと」

水島「うんうん」

モーガン「そう」

伊藤「これ以上、長くロシアに対する戦争を続けてもウクライナ人にとっていいことなんて一つも無いと。だから一刻も早くアメリカから別れろと」

水島「うん」

伊藤「ミアシャイマーさんはウクライナ人の事を可哀想だと思っているから、そういう風に言っている訳です」

水島「うん、うん」

伊藤「これは日本にも言えるんじゃないかと」

モーガン「そう、その通り」

伊藤「これを聞いて、僕が感じたのは、日米同盟を長く続ければ続ける程、日本だけ核抑止力を持てないと。日本だけ自主防衛能力を持てないと」

水島「そうなんですねぇ」

伊藤「益々アメリカの下僕としてアメリカに都合のいいような属国として使われるだけで、最終的にはウクライナと同様に物凄いダメージを受けて、ポイッと捨てられると。そういう運命にある訳ですね」

水島「はい」

伊藤「それから、もう一つ言いますと、アメリカの国内政治は、ご存じのように最近８年間、毎年、不安定になって来て、今年、トランプが勝てば益々不安定化するでしょうし、今年、バイデンが勝てば益々不安定化するでしょうと」

水島「うん」

伊藤「どっちが勝っても碌な事にはならないです。国内政治が、このようにアメリカの国内政治がどんどん不安定化するっていうのは、ハンチントンさんが２００４年に予言していたことで、その２０年前に予言したことが、どんどん現実化している訳ですね」

水島「うん」

伊藤「国内政治が益々不安定化する、どっちが勝っても不安定化するアメリカは、当然のことながら、外交政策も軍事政策も、どんどん不安定化するんです。だから、もうアメリカに期待しちゃ駄目ですよ。僕が日本の方にお勧めするのはアメリカ政府と協議離婚する事ですね」

水島「なるほど」

モーガン「いい感じ」

伊藤「もう私達は離婚して独自に生きていきたいと」

水島「うん」

伊藤「アメリカっていう、要するにウクライナにしてもアフガニスタンにしてもイラクにしても南ベトナムにしても、はっきり言って手玉に取って自分達に都合のいいように利用して、都合が悪くなったらポイッと捨てると」

水島「うんうん」

伊藤「そういう国と一生懸命、同盟ごっこ、フェイクの同盟ですよね。本物の同盟じゃなくて偽物の同盟ごっこをやっていても、日本にとって、いいことなんか無いですよ」

水島「うん」

伊藤「ですから、じっくり協議離婚について話し合って、５年先にはお互いに合意の下に離婚しましょうと。今から５年後の離婚を目指して、日本とアメリカの関係を徐々に普通の国家同士の関係に変えていくと」

水島「うん」

伊藤「現在のような従属関係は、もう続けたくないと。続ければ続ける程、日本の立場は、悪くなるからと。そういうような考えで日米関係を考えた方がいいと思います」

水島「なるほどねぇ。協議離婚っていうのは誠にいい言葉でねぇ、まぁ、いつも言いますけど２６００年の歴史の中で外国人の軍隊が７０年、８０年、居たのは日本の歴史の中で一回も無いんですよね。私は丁度、その間を生きているので、日本の歴史の中で、余計、恥ずかしい事だと思います。だけど協議離婚っていう言い方は非常にいいと思いますね」

モーガン「ちょっとだけ」

水島「はい、どうぞ」

モーガン「協議離婚する前に、こっそりと夫の財産を…」

一同「(笑)」

モーガン「敵に渡して、お金を貰いましょうと思います」

一同「（笑）」

モーガン「協議離婚、いいですけれども、あの夫は悪い奴だから、まず、よく裏切った上で協議離婚に入りましょうっていう風に…」

水島「だから、逆にふんだくられそうな感じするんですけどね（笑）」

モーガン「そうです。協議離婚は、ちょっと出来ないような気が致します、はい。よく不倫しましょうっていう感じで、はい」

一同「（笑）」

水島「なるほど（笑）」

モーガン「はい」

水島「いや、ただ、本当に、そういう歴史の流れを見た時、そういうことがあるっていうことを、ひとつ紹介して、まぁ、別の番組でも紹介したんだけど、この間、ロシアのショイグ国防大臣が替わると。ニコライ・パトルシェフ安全保障会議書記が退任して後任にショイグ氏、アンドレイ・ベロウソフっていう第１副首相で経済専門家が国防大臣になるということです。

それと、もう一つ、やっぱりプーチンの国軍の経済を国全体の経済に結び付ける新しい経済システム。軍隊と国の経済をくっつける行動を始めるっていうのと、もう一つ、これも紹介したんですけど、プーチンのブレーンと言うか、むしろ指導しているのか分かりませんけど、ロシアの文化というか歴史をベースにロシアの未来を築いていこうというのは、まぁ、よく出ているグローバルサウスとかＢＲＩＣＳとか、こういう少なくとも５００年続いた欧米との関係、あれは文明であってロシアの文化と言うか伝統といったものを、もう一回、取り戻した形で、勿論、欧米の文化っていうのは偉大なものもあるんだけども、これから、そういうものから独立した形で生きていくという方向の、アレクサンドル・ドゥーギンですね。

この人はロシア史で社会を啓蒙するっていう中々良い文章でね、ハッキリ言えば、グローバリズムと反グローバリズムの理論をロシアとしてやっていくと。それで子供達も教育をそういう形で自分達の独自の文化、５００年続いた欧米の文明や、そういうものとは、ちょっと独立した形のもので、システムも何もやっていこうというねぇ、もう自分達で生きていこう」

モーガン「はい」

水島「所謂、憧れのヨーロッパに頼らないというような道を歩み始めている。だから、そういう文化的な意味でも文明論的な意味でも、新しい人類の中で流れが始まっている。私達も、実は、それだけの歴史や伝統や文化を持っている訳でね。やっぱり、そういうことをそれぞれの国が独自のオリジナリティを持った文化を継承する。私達がいつも解り易く説明するのはヨーロッパの文明、つまり、どんどん発展していくけれども文化は違うと。三島さんの文化防衛論っていうのはトーマス・マンっていう人の『非政治的人間の考察』っていうのからパクったんじゃないかっていう気がするんだけど、でも文化っていうのは、そういう発展をするんじゃないと。

それぞれの時代で輝く、こういう形の歴史観とかを持ったものを、ロシアが始めているかも

分かんない。実際は判りません。ただ、こういう理論家といったような人達がプーチンに影響を与えて、プーチンもその流れで、この間の演説は、これに署名しているんですよね。

ということなので、やはり、そういう文化的、文明史的な意味でも５００年続いたヨーロッパの、そういう先導ですね。うん。アメリカも含めてですね。こういうものが変わりつつあるっていうこと、その中で今、協議離婚っていうのは誠に敬意を表しつつ、はい、っていうことを上手くやれればいいですけどね」

モーガン「はい」

水島「増税メガネでは、とても出来ないだろうと思うんだけど（笑）。一回、お休みして、これからの自衛隊も含めて、国防について考えてみたいと思います。協議離婚ね。いいですね。みんなが考える夢のような話ですね（笑）。一回、お休みします」

一同「（礼）」

＜後半＞

水島「後半、入りました。先程、伊藤さんからもアメリカとの協議離婚っていうことがありました。実は色々と考えてみると、歴史的なものって、中国から酷い目に遭わせた。或いは、韓国を慰安婦問題とかいうので酷い目に遭わせた。北朝鮮も勿論、言っているんですけども、ロシアの問題については、あまり無いですね。我々が酷い目に遭わされたシベリア抑留とか、あの千島の問題とか。ただ、これも最近、みんなに判って来たのは、ソ連軍の千島の南下っていうのは、プロジェクト・フラっていう形でアメリカの軍艦がソ連兵を運んだっていうね、共同作戦だったっていうことも判って来てね。現実を知ると、雰囲気が大分、違っていたっていうことが段々判って来ているんですけどもね。

先程、言った様に真面目な話、米軍の基地も、あと１０年とかで無くして、去って行って下さいということになると、本当に我々の国の防衛がどうなるかっていうことも勿論、あるんですけども、今、現実的に、さっき用田さんがおっしゃったように海兵隊も空軍もね、今、殆ど居なくなっている。私はこの間、嘉手納に行きましたけど、本当に、そういう意味では実働部隊の海兵隊は殆ど居ない。もう韓国にも居なくなっている。みんな、西海岸やハワイの方に行っちゃっているということになると、やっぱり、いざ有事になったら助けに行くよというようなスタイルで一応、言っている訳ですけど、中々そんな簡単にはいかないっていうのをね、前方に来る作戦っていうのは、もう変わってしまったということを考えた時、じゃあ、我々の今の状態は何だろう。

つまり、今、自衛隊しかないんじゃないかと。ただ、基地があるという形で、日米安保という抑止力というか、そういうものがあるだけなのかなと。それがあっても本当に効果があるのかということを具体的に考え、まぁ、協議離婚の話も出たので思うんですけど、これは、どうなんでしょう。もし、いざとなって、こういうものが無い状態だと、我々は、どういう

ことが出来るんですかね。これは少し飛躍して聞こえるかも分からないけど。つまり核武装というのは、前から矢野さんや私や用田さんも仰っているんだけど、我々に出来る、例えば先程言った四十何兆というお金をね、もっと言えば、もっと出せるんですよ。

本当は、いくらでも出せるんですよ。国債を出せばいいだけの話ですから。ただ、こういうことをやった時、我々は今、こういう状況を踏まえて日本の自立っていうものと主権の回復を考えた時、具体的に、まぁ、勿論、岸田さんって、ああいうとんでもない人を替えることが大事なことではあるんだけど、それ以前に具体的には、そういう軍事的な意味で、一歩一歩、どんなことが出来るのかなぁという風に考えたんですけどね。これは、矢野さん、どうですか。具体的な事ですけどね」

矢野「まぁ、戦えるのかっていう自衛隊の能力という観点から、また、ちょっと、お話ししたいんですけれども、ひとつは精神的な問題ですね。何の為に戦うのかという明確な価値観と言うか、軍としての建軍の本意にあたるようなものですね。これがあるのかと言うと、そこは、はっきり言うと、私は逃げていると思うんですよ」

水島「そうですね」

矢野「つまり自由だ、民主主義だということは宣誓の中にも書いてありますけどね、或いは、日本国憲法を遵守しっていうことも明確に書かれている」

水島「うん」

矢野「だけど、それは本当に命を懸けるに値するものなのかということについては、不問に付していると」

水島「そうですね」

矢野「それぞれの思いによって、みんな、それぞれ考え方が違う」

水島「うん」

矢野「じゃあ、こういう軍隊って、どうなるかって言うと、いざとなった時、本当に有事が起こった場合、その団結や規律が維持できるかということが非常に疑問だと思います」

水島「そうですね」

矢野「先程の、いざとなれば外国へ逃げるという人も居ると言われたんですけども、じゃあ、自衛官の中でも命が危ないんだったら、もう自衛官を辞めるよとか、もう募集には応じないとか、そういう人が出て来る訳ですよね。

現に自衛隊の安全保障環境が厳しくなって、やれ出動だとか、万が一にも有事の際に任務の為に命懸けで働くようなことがあるかもしれない。まぁ、そうなったら、早速、募集が困難になるというのが日本の現状ですよ」

水島「そうですね」

矢野「これは、やはり日本人自身の戦後の従属国でよしとする、政治、それから憲法、それを受けたメディアとかの影響力や教育、こういうものが重なって、小さい頃から真っ当な国であれば教え込まれる愛国心とか国防意識とか国家観っていうのは全くありませんから、そういう点で、さっき言った様な、いざとなったら国の為に戦うなんていう人は１割強しか居

ないという為体になっている訳ですね。

それは、やはり自衛隊も、そういう国民全体の雰囲気の中に居ますから、まず、そこを再建しなきゃ駄目だと思うんですけども、それは自衛隊の問題というよりは国全体、国民の問題です」

水島「うん、そうですね」

矢野「それから二つ目に能力で言うと、大きくは人と物と運用、指揮の問題があるんですけれども、人の問題についてはさっき、ちょっと言いましたように、その予備役というものが、日本には殆ど無い。４万８千ぐらいの予備自衛官が居るけども、これは一応、定員ですが、充足は７割で３万３千とか４千しか居ないんですよ。こんな国は、世界の何処にも無いです」

水島「うん」

矢野「正規軍の２割弱しか予備役が居ない。こんなのは予備役じゃないんですよね。通常、大体、同等、もしくは倍ぐらいあるというのが普通ですよ。そうしないと、平常時は常備軍を大量に抱えておくというのは非常に非効率ですし…」

水島「そうですよねぇ」

矢野「国民一般に国を守るという意識が広がりませんから、そういう意味で、普通の国は、予備役を現役の倍ぐらい抱えて、いざとなったら動員をかけて招集して、急速に兵力を増強すると。普段もそういうことで予備役として軍務に就くことによって、国民一般に軍に対しての理解とか親しみを持ってもらう。

それと同時に国民全体が守るという国防意識を普及すると、特に陸軍の場合、そういう意味合いが大きいんですけども、そういうこともありますし、それから現在のウクライナでも見られるように、色んな特殊技能が必要な訳ですね。ドローン操縦とかもありますし、ＡＩとかサイバーとか航空宇宙関係、それから医療とか、まぁ、さっきも言いました法務とか、そういった専門技術というものが非常に要求されるようになっていますから、そういう点で、何処の国も軍と民間力を、いかに一体化して、民間の持っている優れた先端的な専門技能を吸収するかということに非常に重点を置いている訳ですけれども、日本も基盤はある訳ですから、それをやるような体制にすべきだと。その為には、やはり動員ということを考えなきゃいけない」

水島「うん」

矢野「昭和３０年頃に１０万人規模の郷土防衛隊っていうのを創るという構想が当時、国会で審議されたんですけども、結局、さっき言った自由党系の反対と、それから社会党の反対もあり、当時は経済成長期でしたから人が集まらないということもあって立ち消えになって、それ以来、もう全然、進まなくなったんですけれども。予備役が制度不備のまま放置されている。

だから、まず人が居ない。戦い続けられない。本来は損耗補充とか、後方の警備とか、或いは色んな後方業務、こういうものに就くということが予備役のしたる役割ですけれども、それを果たす人は居ません。だから、防衛計画を作っても、それはあくまで絵に描いた餅であって、本当はそこに補充する人が居ないです」

水島「うんうん」

矢野「ですから戦い続けられない。それから物の面についても、これは弾薬がどれぐらいあるかという機密事項で言っちゃいけないことではあるんですけれども、米軍ですら、湾岸の時に使用した弾薬が１．９万発っていうことで、それが基準になって弾薬生産量なども平時にどれぐらいもつかと、備蓄」

水島「うん」

矢野「それから緊急時、増産をどうするかっていう基準にしていたそうですけれども、現在は、ロシア軍が１日に１万発、使っているんですね」

水島「うん」

矢野「ミサイルだけでも、１日、多い時で１００発ぐらい使っている」

水島「あぁ」

矢野「それに対してウクライナ側は、要求が１８００発であるのに拘らず、その要求を中々満たせないと」

水島「うん」

矢野「現在、ロシア軍は年間３００万発の生産能力を持っていると言っていて、ＮＡＴＯ側は３２か国居て、アメリカ以下で総力をかけても１００万発がやっとという状況」

一同「あぁ～」

矢野「こういう状況ですが、じゃあ、日本がそれを笑えるのかと言えば、もっとお寒い限りで、恐らく１．９万発の所要に対しても現に数十分の一ぐらいしか無くて、増産したとしても、その数分の一ぐらいしかないんじゃないかというのが、私の見積りです。

例えば火薬の元になるニトログリセリンとか、こういった材料すら今、国内で中々増産出来ない。製造工場が極めて限定されているという状況ですね。だから輸入に頼っている。こんな状況ですし、使用装備はアメリカ製に頼っている。今回のウクライナの状況を見ても他国の装備、それから武器弾薬に頼っている、特に弾薬ですね。こういう国が勝てないということは、はっきり解っている」

水島「そうですね」

矢野「ロシアは戦争を予期して、もう１０年ぐらい前から国の総力をあげて備蓄量を増やし、それから軍事生産基盤をソ連時代以来のものを引き継いで、更に強化して今回の戦争に臨んでいる訳です。ですから見積もりの倍以上の生産能力を持っているということが、開戦後、明らかになった。だからＮＡＴＯは明らかにロシアの潜在力を過小評価した」

水島「そうですね」

矢野「これが現在のウクライナが圧倒的に敗退している最大の原因ですよ」

水島「不利になっているね」

矢野「ですから日本の場合、軍事生産能力は、特に潜在力は高いんですよね。世界的工業国

家ですから。だから資源が輸入できる間に、しっかり備蓄して増産して、それで尚且つ余力があれば、武器輸出をすればいいという風に思いますよね。その武器輸出についても、韓国なんか、今、盛んにやっていますけれども、砲弾が無い時に韓国が百数十万発、ウクライナに送っているんですよ。それ程、能力を持っている。北朝鮮も２００万発から３００万発を送っているんです。という風に言われていて、南北朝鮮ともそれ程の潜在的な軍需生産能力を持っている。

韓国もインドとかポーランドに戦車とか火砲を、千門とか千両とかっていう単位で輸出しているんですけれども、それ程、国をあげて真剣に取り組んでいるんですよ。だから日本は、そういう努力を全くやっていないです。だから緊急増産能力も無いし、輸出力も無いし、販路も無い。だから武器を実際に使ってないので、性能についてもチェックが出来ていない」

水島「なるほどねぇ」

矢野「だから送ったけれども役に立たないという、防弾チョッキでも一部、そういうのが出ているっていう話もありますけども」

水島「あぁ、そうですか」

矢野「本当に日本は人の面でも物の面でも体制に於いても、まぁ、法制の話はさっき出ていたので言いませんけれども、未だに決して平和安保法制が通ったから万全じゃなくて、未だ未だ極めて不充分で、それを受けて細則というか実際に実行できるような体制にはなっていないですね。ですから台湾もそうですけれども、国家総力をあげた戦争遂行の体制っていうのは日本には全く無いです。意図的にそういう風にしてきたんです」

水島「うん。う～ん」

矢野「アメリカに頼っていればいいと胡坐をかいていた。だけど、それが、もう全く通用しなくなっているということが今になって明らかになって、それで本来、もっと慌てなきゃいけないんですけれども、それでも目覚めないで平和ボケのままで続いていると。一部でも解っている人だけが焦っていると。特に若い方が、それに対して非常に危機感を持っているというような現状だと思いますね」

水島「なるほどねぇ。室伏さんが知っていると思うけど、この間、運用の問題で２５兆円ぐらい財務省が儲かったっていうのは何でしたっけ」

室伏「あぁ、あれです、外為特会ですね」

水島「え？」

室伏「外為特会ですね」

水島「あぁ、そうそう。例えば、そういうのがあるじゃないですか」

室伏「はい」

矢野「その一方で、ウクライナ復興支援という名目で負けて枯渇するのが判って、返済不能になることが判っているウクライナに対して、９兆円の金をですね…」

水島「用意しているっていうね…」

矢野「共同責任で保障している訳ですよ」

水島「連帯責任ですよ」

矢野「だから血税を使うっていうことも約束してしまっているんですね。国際的に」

水島「本当に国を売るね、そのお金を使って９兆円あったら相当なことが出来ますよね」

用田「自滅。自滅の道ですよねぇ」

水島「全くそうですよ」

用田「どの話を聞いてもですねぇ」

水島「う～ん」

用田「だけど、先程、おっしゃられたように、勝つ為に、やっぱり勝つ方策がなきゃいけないので、さっき言いました艦隊を沈めることを構想としてはできるんですね」

水島「うん、うん」

用田「何故かと言うと、これは千キロを飛ぶようになるのが、陸は多分、来年かな。来年、陸上自衛隊が千キロ飛んだミサイルが入るんですよ」

水島「うんうん」

用田「それで航空自衛隊と海上自衛隊も入れるんですね。そうすると千キロの円って、この前、お見せしましたように東シナ海、南シナ海は全域を覆うことが出来るんですよ。だから構想とすれば、基本的に、それを使えば最低限、通常の弾でも、或いは、その弾の中でも、電波とかそういうやつが出るようにするんですよ」

水島「うん」

用田「船は先程、申し上げたように電波吸収体ですから、要するに一発、パァ～ンッとかけると、要するに死に体で浮かんでいるだけですよね」

水島「うん」

用田「だから、それを沈める。或いは、核を持って、ＥＭＰ、あぁいうのを持つと、基本的に広い範囲で船を無力化、動かさなくすることが出来る。だから潜水艦は生き残るかしれんけれども、水上艦は生き残らない海軍って無いですもんね。だから片一方でもいいから潰せるチャンスがあるし、だから、千キロ飛ぶ奴が千発、使えますというのであれば、伊藤先生がよくおっしゃるように、その中の２００発ぐらいを戦術核にする。或いは、ＥＭＰに何発か、所謂、何十発かにするということだけでも相手の通信電子システムは、基本的に崩壊しますから、それ以外に、我々はこの前申し上げましたように、電波の妨害をするという通常のパターンのやつを今、持っている訳です。ロシアが持っているタイプのやつを。

それは基本的に、そのピンポイントで邪魔したりすることが出来るし、先程、情報は取れますよと言ったのは、その電波妨害というやつで基本的に電波を出した所のポイントが判るんですよ。あまり細かい事は言えんけど。出せば、その場所が判るんです」

水島「うん」

用田「要するに、その海に浮かんでいる船みたいに」

水島「はい」

用田「だから、そうするとすれば電波をピーンッと入れた途端に、極論からすると判る訳です。それが基本的にその情報を掴める大きな第一列島線というか、この島、日本に居るが故にアメリカも共有できる物凄く情報な訳です」

水島「なるほどね」

用田「もっと言えば、ミサイルを撃ちあげたぞって、打ち上げるぞと言った時に、それに向かって色んなことが出来るかもしれんなと、その妨害することが出来ると。だから第一日本列島を、そのまま放置して捨ててしまって、ええのかよってアメリカへ言うと。そうしたら、あと太平洋しか無いから、お前のとこ、アウトだぜと。ただ腹の底で考えている別な人って、矢野さんが、ちょっと言われたグローバリストの腹の中にはアメリカみたいなナンバーワンみたいな奴も要らないんだと。そうなると話がまた変わって来るんですけどね」

水島「まぁ、そうですね」

用田「まぁ、その話は横に置いておいて、だから、基本的に、そういう中で撃滅、１５年間、やって来た営々として、日本だけはそれをずっとやってきたんですよ。その対艦ミサイルも、私の時にぽっと出た訳じゃないんですね。先輩方が、ずぅっと作って来てくれて、北海道の稚内とか、あそこの５０キロぐらいしかない所だけども、海空から余計なことをするなと言われて射距離を短くさせられて、海の領域に入るなと、空の領域に入るなということで、でも営々として作って来たやつの距離を伸ばすだけ伸ばせと」。

水島「なるほど」

用田「やっと、それが出来て来ている。だから集団としては持っている訳です」

水島「うん」

用田「ところが矢野さんが先程、おっしゃる通り、ウクライナを見ると、何が起こっているかと言うと、やっぱり弾薬庫だとか兵站だとか、そういうものの情報を全部、掴まれているのでピンポイントで、そこが最初に潰されている訳です」

水島「そうですね」

用田「今も潰している。指揮所も潰している」

水島「そうですねぇ」

用田「だから、そういう所を狙うというのは常道ですけれども、それがピンポイントで出来て、尚且つ長距離で飛んでくれば無人機でも出来ている訳ですね。それを考えると、今、南西諸島の島に配置していますね」

水島「うん、うん」

用田「平成の時に出したから、私は平成の防人と言っているんですけども、防人は基本的に家族を含めて帰って来られないんですよ」

水島「うんうん」

用田「帰って来られない（涙）」

水島「うん。そうですねぇ」

用田「だから先程、申し上げた通り覚悟があるんですよ、覚悟が」

水島「そうなんですよ」

用田「ちょっと、すみません、乱しちゃって」

水島「いや、でもねぇ、本当にそれは感じますね。そういう覚悟でね。例えば、我々が与那国島へ行くじゃないですか。僅か二千人か何かですよ」

用田「はい、そうですね」

水島「それで車で周ったら１５分か２０分で周れる島。台湾が近いでしょ。見える時もある。でも、あの当時、警官が二人しかいなかったです。本当に。実は、我々は騒いだんですよ。ちょっと待てと。ちょっとゲリラみたいな人が大きな銃とか機銃とか、あぁいうのを持って、１０人ぐらいか５人ぐらいで来たら、この島を全部、占領できちゃうと。人質に出来ちゃうというね。だから、まぁ、拳銃の予備もあるだろうけど、警官二人って言ったら２丁か４丁ぐらいしか無いんじゃないか。これで、この島を守れるのかってねぇ、それで元町議だった方が今、町長になっていますけど…」

矢野「糸数健一さん」

水島「うん、そうそう。この人は我々とも話して、とにかく呼ぼうって言って呼んだんです。これがきっかけだったんですよ。拳銃が二つしかない島っていうね。これで最先端の島を守れるかっていうね、これに入って行くと、本当に進駐した人達も含めて、私は先島を見ていると、本当にそう思うんですよね。あの兵隊さん達は多分、帰れなくなるっていうかね…」

用田「まぁ、だから南西の壁と私は言ったけど、名前は格好いいけど…」

水島「はい。そうなんです」

用田「現実は、そういうことですよ」

水島「そういうことですよ」

用田「それで島自体も大きな島ではあるんですけどね、だけど、それは基本的に弾薬だって、だから置く場所についても、文句を言われている訳です。こんな所に置くなとかですね」

水島「そうそう」

用田「あ、すみません。だから、今の戦の状況、ウクライナなんかを見ていると、無人機だとか、そういうやつは相当、飛んで来る訳ですよ。それは基本的に漁船だとか、或いは、輸送船だとか、普通のタンカーだとか、そういうやつに積んでバンバン飛ばして来られる訳ですよ」

水島「うん」

用田「だから、基本的にああいう集中攻撃を食らうだろうと思う訳ですね。だから、それを食らったとしても防護が出来て、尚且つ、戦い続けるという体制が必要ですね。それは、基

本的に、この地域しか使えないとか、あの地域しか使えないという今の、そのう…」

水島「あるでしょうね」

用田「えぇ。そういう体制では基本的に出来ない訳ですね。だから、私は、手段はあるけども、短期決戦と、それから先制攻撃という風に言ったのは、今の日本はどう考えても、それしかオプションが無いんですよね」

水島「うん。それとねぇ、さっき言った差し違えっていうね」

用田「あぁ、はいはい」

水島「つまり自分も死ぬけど相手も殺すっていうのは、その覚悟はね、我々の中で、非常に大事だと思いますね。俺が死んでも相手もやるっていう覚悟があった時、初めて、抑止力にしろ何にしろね、その体制が無いですね」

用田「いや、だから政治家は島に行って、その家族だとかに会って来ればいいんですよ」

水島「うん」。

用田「どういう気持ちでそこに居るのか」

水島「うん」

用田「或いは、その国民避難、それは全般的にしますよ」

水島「うん」

用田「真っ先に自衛官が逃げ出す訳にいかないですからね」

水島「そうですよね」

用田「基本的に、もう、そこに居なきゃいけない。居座るということは宿命な訳ですよ。やっていることはですね。だから、そこら辺のところを知るだけでも全然、気持ち的には、違って来るんじゃないかと思うんですね」

水島「そうですね」

矢野「国内法制で言うと、依然として非常に縛りが多いんですよね。例えば弾薬庫を造るのにしても、火取法、火薬類の取締法というのがありまして、理学距離とか安全管理で、壁を造るとか色んな制約があって、一か所に弾薬を集中して置けない。しかも周りが民有地だと、そこから安全距離がとれないということで」

水島「う～ん…」

矢野「逆に自衛隊が出て行かなきゃならないっていうのが、特に都会部では多いんです」

水島「なるほどね。あぁ…」

矢野「小さい島でも弾薬庫を造るっていうのは、そういう点で中々出来ないですよね。それに対して特例措置を執るというようなことでやっていない。それから、火薬類の輸送運搬をする時も一挙に運べる量が決まっているものですから、自衛隊が火薬弾薬を運ぼうとしても、本来もっと積載できるのに積載量を抑えて運ばないといけないとか、それから、電波法の規

制があって、例えばドローンをテストするとか電波兵器を使うとかっていうことになっても、それは国内法では出来ない。出力が制限されているとか、ここは飛ばさないとか規制だらけですよ」

水島「あぁ～、これは、お二人が専門だから聞きたいんだけど、今回のウクライナ戦争とかね、あれで物凄いドローンっていうのがね…」

矢野「えぇえぇ。ドローンの数は凄いですよ」

水島「双方が使っているじゃないですか」

矢野「えぇ、ドローンはＮＡＴＯ側っていうかウクライナ側が１万基を飛ばしていて、ロシア軍がその７倍を使っていて」

水島「うん」

矢野「それに対しての対空機関砲とかミサイルが非常に有用だっていうことが明らかになったんですが、それ以上に有用だったのは電子戦なんです」

水島「あぁ、電子戦。はい」

矢野「電子戦で電波妨害をしてコントロール不可能にするんです」

水島「あぁ、ドローンを」

矢野「そうすると面的にやられちゃうんですね」

水島「あぁ～」

矢野「ロシア軍は１０キロ四方面に必ず一基はそういう電子戦兵器を、開戦当時から置いているんです。だからねぇ、電子戦はロシア軍のほうが上だったんです。今でも上です」

水島「そうでしょうね。前に用田さんもこれねぇ…」

用田「そうです」

矢野「数から言うと、それに対抗してウクライナ軍は去年、既に１００万基を造るって言ったんです」

水島「あぁ。はい」

矢野「その１００万基の数でも足らないって言って、今、ＮＡＴＯがいくらって言ったかって２千万基ですよ。それ程、戦場に於いては所用量があるということです。飛躍的にドローンの価値というか、これがゲームチェンジャーになっていくのが明らかになって…」

水島「そうですよねぇ」

矢野「それを管理、コントロールする指揮システム、それから、電波妨害を回避する為のセキュリティの問題ですね」

水島「う～ん」

矢野「これは非常に重要になっているんです。だから今、有線のケーブルを引いてドローン

を飛ばしているんです」

水島「あぁ」

矢野「数十キロ彼方まで。そういう兵器も出て来ている」

水島「なるほどね」

矢野「電波妨害が出来ないですよ」

用田「有線の方が妨害できませんからね」

水島「そうですよね。有線だとねぇ」

用田「だから今の話から行くと、ここまで言うんだから言っちゃう部分があるんですけども、日本の自衛隊が貰っている電波帯っていうのはクズみたいな電波です」

水島「あぁ、そうですか」

矢野「それも有効周波数で」

用田「テレビとかは、一番、いい電波帯がある訳ですよ」

水島「うん」

用田「そんな所の電波帯は、全く自衛隊は与えられていない訳です」

水島「あぁ～…」

用田「その電波の周波数も少ないですよね」

矢野「そうです、そうです」

用田「物凄く少ない。限られた周波数しか与えられていない訳ですよ。だから今みたいな行動は…弱点を晒すからよくないかなぁ（失笑）」

矢野「いや、だけど現実ですから」

用田「まぁ、現実の問題として、えー…」

矢野「出来ない」

用田「ウクライナの足元にも及ばない。ロシアの足元にも及ばない。ところが電波妨害機っていうやつは今度、つくったんですよ」

水島「うん」

用田「これはロシアの持っている電波妨害機よりも日本の方が優れているんです」

水島「おぉ、う～ん」

用田「だから数をつくって、今、１０キロ単位に置くって言ったじゃないですか。置けば、いいんですよ。ところが列島線」

水島「それは一基、どれぐらいかかるんですか」

用田「え、一両。一両ですね」

水島「え？」

用田「車両ですから」

水島「あぁ、一両ですか」

用田「はい」

水島「それで値段はどのぐらいですか」

用田「え、数億じゃない？」

水島「え？」

用田「数億はしないと思います」

水島「数億で出来るんですか」

用田「うん。何億で。戦車みたいにしません」

水島「だから１００台、つくったって…」

用田「安いもんですよ」

水島「えー、２００億ぐらい」

用田「はい。勿論、それだけでは運用できませんけどね」

水島「うん、いやぁ、だけど、その１０キロ毎にやるって言ったら、いざとなったら、そこを、ばぁ～っとやれば、あのう…」

用田「そうです、そうです」

矢野「出来るんですよ」

用田「出来るんです」

水島「相当、役に立つんじゃないですか」

用田「だから相当、いいやつがあるんです」

水島「ねぇ」

矢野「いや、むしろゲームチェンジャーですよ」

水島「ねぇ」

矢野「電子戦が決戦兵器ですよ」

水島「だから、我々が見ていて、やっぱり今迄のウクライナ戦争を見ていると全然、違うと。戦車が出た、ミサイルが出た、そう言うけど、ドローンがえらい確率で戦場に…」

矢野「そもそも戦車が前線へ出て行って敵と交戦する距離に入る前に、みんな、やられちゃ

うんですよ」

水島「うん、ですよねぇ、何か…」

矢野「衛星とドローンで常時観ていますから、昼夜を問わず天候気象を問わず、地表にあるものから水上にあるもの全てグローバルに把握できます。それが、今の最先端」

水島「そうなんですね」

用田「だからロシアは何か鎧を着たような大きな戦車が走っているじゃないですか。あれは、恰好はいいけど、どうせ見つかっているから基本的にドローンとかにやられても、逆に生き残るようにって作ったやつなんです」

矢野「あれは…」

水島「亀戦車とかいうやつでしょ」

用田「亀ですよ」

矢野「あぁ、あれはねぇ、亀の甲羅の下に電子戦兵器が入っているんです」

水島「あぁ」

矢野「それとガードする、装甲もあるんですけどね」

水島「なるほど。それは凄いね。それで何故、今頃、トマホークを買ってやるんだろうっていう…」

用田「だからトマホークなんか…」

水島「全然、役に立たないでしょう」

矢野「数十年遅れですよ（失笑）」

用田「日本の対艦ミサイルがあるのにトマホークは要らないじゃないですか」

水島「要らないですよねぇ」

用田「全く要らない。だから、さっき申し上げたように目的が違うんです」

矢野「（苦笑）」

用田「指揮権を執る」

水島「あぁ～、そういうことか」

用田「はい。トマホークを買ったお陰で、海上自衛隊は完全に敵地攻撃が出来なくなる訳です。アメリカのコントロールで。狙いはこれですよ。もちろん在庫処分も（苦笑）」

水島「踏んだり蹴ったりだ（苦笑）」

矢野「だから、今、重要なのは指揮統制権と情報ですよね」

水島「そうだね」

矢野「それを殆どグローバルで握っているのはアメリカです。だから、ミサイル防衛出動で撃つと言っても、それは、あくまでプラットホームで使っているだけで、それの指揮統制、全体をやって、このウェポンで、ここを撃てっていうのは実質、みんな、アメリカの指示でやっているんです」

水島「何のことないですね、金を払って…」

矢野「海空はみんな、基本そうですよ」

水島「いやぁ、聞きしに勝る…」

矢野「だから、さっき言われた指揮統制権」

水島「うんうん」

矢野「これが統合されて一元化されれば、もう完全にその指示で動かざるを得ないんですよ」

用田「そういうシステムになっちゃった…」

矢野「システムに組み込まれちゃっている」

用田「先程、申し上げた『からくり』ですよね。大分、そうなっています」

水島「うん、モーガンさん、どうですか。お聞きになっているとは思うけど、こういう状態ですよね。アメリカの同盟国って他の国も、みんな、そうですかね」

矢野「ＮＡＴＯは基本的にそうですね」

水島「やっぱりＮＡＴＯはそうですか」

矢野「うん」

水島「あぁ～」

モーガン「先程の話で言いますと、まぁ、協議離婚の話に戻りますと、そもそも、私の考えでは結婚にはなっていないと思います」

水島「なるほど（笑）」

モーガン「物凄く家庭内暴力を受けているだけですし…」

一同「（笑）」

モーガン「日本人が、あの国、あの連中に殺されていますし、所謂、結婚は日本人の大虐殺の中から生まれたという…」

水島「そうですね」

モーガン「まぁ、人質問題になっていると思いますし、要は日本人が人質になっていると思います。協議離婚よりも、ちょっと過激なことを言っていいですか。普通に考えれば、あのような夫は食事に毒を混ぜることは…」

一同「（笑）」

モーガン「具体的に何をすればいいかって言うと、まず総督府を落とす。失脚させる。で、その総督府は相当、嫌な人物、厭な人間で、きっと汚い事ばっかりやっていると思いますので、それを探せばメディアに漏洩すればいいし、エマニュエルの弱点を探して、それを思いきり打つ訳です。

もう一つのやるべきことは、あいつと協力しているグローバリストの連中を全て落とす訳です。日本国内のメディア、あとは学会とか政界、評論家」

水島「そうですねぇ」

モーガン「伊藤先生がおっしゃった、日本にとっていいことのない日米同盟。それは、私も、そうだと思うんですけど、唯一日米同盟で自分の立場が良くなっているのは、親米保守」

水島「そうですね」

モーガン「その親米保守も落とせばいいと思いますし、だって、ウクライナに日本の武器を送るとか、あのような全く無責任な事ばっかり言っていますので、あの売国奴の連中を落として失脚させればいい。あとグローバルサウスとかロシアとチームを組んで強くなると思います、日本国内のパトリオット」

水島「そうですねぇ」

モーガン「アメリカのパトリオットとチームを組んでいいと思います」

水島「はい」

モーガン「先程、ドゥーギンの話が出たんですが、私、ドゥーギンが大好きで、ドゥーギンは優れた哲学者だと思います。彼が言っていることは常識です。アメリカでも結構、響きます。自分の国は自分で決めようっていう感じ、その様なことは常識で、自分の国の子供をＬＧＢＴっていうイデオロギーから守るとか、それも当然なことで、グローバルサウスって、あのような可愛らしい言い方で、ただで済むはずがないと思います。グローバルサウスは何かって言うと、矢野先生がいつもおっしゃっているように５００年間、白人の搾取を受けて、その５００年間の被害者が今、グローバルサウスで纏めていっているんですけれども、あのグローバルサウスは復讐したいと思いませんか」

水島「うん」

モーガン「あのグローバルサウス、例えばニジェールとかマリとか、あのような国々の方、ブルキナファソとかは多分、フランスとか元植民地の国に対して復讐がしたいと。考えれば、日本もグローバルサウスの一つの国じゃないですか。白人の搾取をずぅっと受けていて、あのような国とチームを組んでいいじゃないかと思っています」

水島「うん」

モーガン「復讐のやり方としては、例えば、今、日本の港には敵の船がいっぱいあるじゃないですか。協議離婚になれば帰る訳になるんですけれども、あの船が太平洋の途中で沈んじゃうような工夫をすればいいんじゃないですか。はい、ご苦労様ですと言って、１週間ぐらい経てばマリアナの海の真ん中の谷に沈んじゃったと。そのような復讐の仕方、一石二鳥です」

水島「うん。なるほど」

モーガン「あと受け身的じゃなくて、もっと積極的に尖閣とか竹島とか北方領土」

水島「はい」

モーガン「それを取ればいいと思います。力の示し方としても、あの生意気なチョクックという奴が、この間、竹島に上陸したじゃないですか。あの左翼の政治家が竹島の上に乗って、日本の自衛隊がそれを取ればいいんじゃないですか。もう、冗談じゃないという意味で」

水島「途中まで海上自衛隊は訓練をやっていたんですよ。竹島の傍でね。それを自分でやめちゃったんですよね。韓国に気兼ねするという感じでね。どんどん自分の国を放棄していますからね」

モーガン「だから奴隷根性とか、社長がおっしゃった奴隷根性。矢野先生が戦後日本は欺瞞体制とか、その通りですので、ある意味ではクーデターっていう言葉を口にしたらあれですけども、今の体制の中からは良い事が出ないと思いますので…」

水島「そうですね」

モーガン「行動的なことをやって、そうしない限り、ずぅっと、このままで、やられる放題で、本当に日本としては受け身的だけで敵の出方を見て待っているみたいな感じです。そうじゃなくて敵が出る前から先制攻撃をするとか、この国は、もうやられていますので、平和ボケとよく耳にしますが、そうじゃなくて戦争ボケで日本人は情報戦に慣れちゃった訳です。８０年間、経つんですよ」

水島「うん」

モーガン「ずぅっとワシントンに情報戦ばかりやられていて、それに慣れちゃったような気がします。もう返せばいいじゃないですか。その時期が回って来ていると考えています」

水島「はい。いやぁ、本当におっしゃる通りのことですけどね、もう一つ、やっぱり、今、言ったグローバルサウスの事で、これは最近のニュースですけどね、Ｘにあるんですけど、イランとインドはサバハル港に関する１０年間の協定に署名」

モーガン「はい」

水島「つまり、どういうことかって言うと、ロシアのモスクワからずぅっとイランを通って、ここのモンバイまで、ずぅっとルートを造って鉄道で結んじゃう。つまりロシア、イラン、インドとこういう形で結ぶっていうね、それこそグローバルサウスの流れで…」

用田「しかも南北回路ですよね」

水島「そうです」

用田「南北回路と言っていますね」

水島「だから、この線でヨーロッパ側を遮断しちゃうって。これは一帯一路とは違うんですね。一帯一路は、こういう感じですからね。だから、こういう形で南のインド洋まで出るね」

モーガン「賢いです、それは賢いです」

水島「こういうようなインド、イラン、ロシアということもやっているって」

モーガン「インド人はやりますね」

水島「だから、これは何がいいかって言うと、非常に大きな視点で、色んなスタートしようとしているっていうねぇ、こういうことがあるので、我々は今、それが足りないというかね」

モーガン「それが恰好いいですね。恰好いい」

矢野「元大国だけあって、それだけの戦略性があるんですね」

水島「そうですねぇ」

矢野「発想として。日本にはそれが無い。戦前まであったんだけど」

水島「全くね」

用田「この前も申し上げたように、インド洋を使うからアジアとアフリカを太平洋と大西洋を通らないで結べるっていうことですよ」

水島「そう。全くおっしゃる通りです」

用田「問題はアゼルバイジャンですよね。アゼルバイジャンとアルメニアの問題がありますがアゼルバイジャンが上手に通れば…」

水島「うん」

矢野「だから、まぁ、トルコも絡みますよね」

用田「トルコも絡みます」

水島「いやぁ…」

用田「でもトルコは今、ロシアにくっつき始めている」

矢野「そうですね。だから明らかにイスラエル、アメリカからロシア側に替わっていますからね」

水島「これ、カスピ海の間を抜いて、こうやっているっていう…」

用田「まぁ、陸路で、ずぅっと、そこが行ければ、ですね」

水島「まぁ、そうですね」

用田「アゼルバイジャンを通れればベストですけどね」

水島「そういうことですね」

矢野「これからはロシア、インド中軸になってね」

室伏「これが通ったら今、正にスエズ運河、紅海上でフーシの攻撃があって、かなりの物流が昔の喜望峰、喜望峰経由になっている」

水島「うん、そうですね」

室伏「今、日本は、そっちに頼っているから物流コストは上がるし、また危険性もね、別に、ほら、あの長い分のその喜望峰の後に危険性とか、そういうことが出て来る訳じゃないですか。でも、これが出来ちゃったら、向こうは、そんなこと全く関係なく物流が出来るから。安全性と、それからコストが安いっていうことを考えたら、さっきの赤いラインを使うっていうのは、ビジネス的に言うと合理的な選択になるはずですよ」

水島「うん、うん。いや、そういうことですね」

室伏「そうなった時に、もう、そこを使わせて下さいって頭を下げざるを得なくなるし」

水島「うん、そうですよ」

室伏「まぁ、日本の国家観の無い企業なんかだと平気でスルスル、スルって行っちゃうかもしれませんよねと」

用田「あと、北極回路ですね。北極航路」

水島「そう。伊藤さんが言っていたあれですね」

室伏「そうですね。今、あの原発船ですか」

用田「あぁ、そうです」

室伏「原発船を…」

水島「そう」

用田「原子力船」

室伏「それで、実際に、それ自体も原子力で動いているけども、要は、北極海側の地域に、あれ自体が発電所になって電力供給するって、これはドイツのＤＷがドキュメンタリーで、ずぅっと報道していましたけど、これって日本で報道されたんですかね。あまり知っている人は居ないんじゃないですか」

水島「していないでしょう」

矢野「まぁ、発想は元々日本ですよ」

室伏「(笑)」

モーガン「但し、今、これを知ろうとすると…」

矢野「東日本の震災のあと、やっていたんで」

モーガン「日本の政治家が、そんなことをしようとすれば、次の安倍さんになりますので、まずは国内のアメリカの権力を無くさなければならない」

水島「あぁ、まぁ、そうですね」

モーガン「それが第一の課題だと思います」

水島「はい。やっぱり、そこの具体的なところで言うと、我々が今、提唱しているのは、この間の１３日に随分１万人以上の人が集まってもメディアは殆ど報道しない。反パンデミッ

クの集会、ところが３１日、今度、またやるんですけど、これは日比谷野音でやるんだけど、これも公称は１０万人って言っているんだけど同じぐらい集まると思うんですね。これは、スイスの医者の反パンデミックの団体と連絡を取り合いながらやるんですけど、我々も勿論、協賛でやるんですけど、こういう流れですよね。

今言った様に小選挙区で言うと自民党か野党かみたいな形で、ちょっと人気がある政党で、この間、参政党っていう政党が１８０万票取ったけど、１議席。でも、そういう反グローバリズムの政党を残したまま、そういう集団を創って出ると政権奪取まで考える事が出来るだろうって、私が提唱しているんですけどね。みんなで、その政党やグループを残したまま、反グローバリズムの流れの中で、そういう団体を創って選挙もやると。だから小選挙区でも自民党と野党と第三の党として充分、戦えるものを創っていかないと今、おっしゃったように国民軍ですよ。私から言えば日本軍です。

国内に於ける反日軍対日本軍の戦いみたいなことを本当に創っていかないと、中々、難しいだろうと。所謂、反グローバリズムの流れだと、意外と、みんなが賛同して一緒にやってくれるんですね。或いは、反パンデミックというのは、命とか公衆衛生に関わる問題だから、あまり、これを言うと、直ぐバンされるんで気を付けて話していますが、そういう公衆衛生の問題で言うと、今、ＷＨＯがパンデミック条約で我々の緊急事態条項に感染症が入っているんですよ」

モーガン「そうです」

水島「他のところは、そんな感染症法を入れるようなのは何処にも無いんですよ。つまり、益々グローバル化させる、日本を主権国家じゃなくす作業をずぅっとやっているっていうことがあるので、あのう…」

室伏「グローバリズム化っていうよりも、グローバリズムとはグローバリストの草刈り場によりしていこうという…」

水島「はい」

室伏「そういうことです。もう例のパンデミックの時、結局、正に自ら進んでそうした訳じゃないですか。ですから、今、ネットの YouTube の方でもそうですし、地上波も、もう、あまり見ないで分からないんですけど、たまに見かけると、やっぱり、そういうお注射ＣＭがいっぱい流れているんですよ」

水島「そう」

室伏「だって、やたらと脅かす訳ですよね。対象になりそうな年齢の人達に、やたらと、ヤバイですよ、ヤバイですよって言って、以前は、そんなの完全に無かった訳ですよね。勿論、検査に関しては東日本大震災の後のＡＣのＣＭが流れて、まぁ、ポポポポポンか、あのう…」

水島「そうやって気を付けて言いながら。はい」

一同「（苦笑）」

室伏「そういうあれでしたけど、また同じようなことが起きているってね」

水島「いや、そういうことですよ」

室伏「だから日本人も日本も全く学んでないんだなぁっていうのが凄くよく解りましたけど」

水島「まぁ、やっぱりねぇ、そういう意味で言うと、今年の秋辺りから新しいのが流行るという噂もあってね」

室伏「えぇ」

水島「もう、みんな、手ぐすねを引いている訳ですよ。そういうものの定期注射とかいうことを、みんな、もうやっているっていう、これも、やっぱり世界をワンワールドにしようとする、ひとつの流れだと思うんですけどね」

用田「日本テレビの宣伝も、さっき、おっしゃった通り何とかワク何とかとか、どうして、こんなことを今、やっているのか…」

室伏「えぇ」

用田「あれの話をするのと」

室伏「はい」

用田「帯状疱疹まであります よ。私は一回、帯状疱疹をやったけど、あれは原因が判っているから」

水島「（笑）」

室伏「はい」

用田「それに対する予防なんかしますとかね」

室伏「はい」

用田「いくつやるのっていうぐらい出てきますよ」

水島「いや、だから定期化させようというね」

室伏「これまで聞いたこともないような病気のものまで出ていますからね」

用田「びっくりですよ」

水島「だから、いかに儲かるかというね」

室伏「はい」

水島「これ、あまり言うと、皆さん、本当に気を付けて下さい（失笑）。バンされるの、嫌なので」

矢野「要は医療マフィアの既得権益なりつつあるんですね。ＬＧＢＴの性転換手術もそうですし、同じです。人口の削減です」

水島「私はこの間、大阪で講演をしたんだけど、そこに出たお医者さんが言っていたけど、今の医療は、もう医療とは言えないと。とにかく金を稼ぐ為のシステムづくりをやっていると。だから、あまり問題の無いことを言うと、血圧をね、昔は９０プラス年齢って言っていたじゃないですか。ところが今、１３０を超えたら、もう高血圧になっちゃう。それで降圧

剤、飲ませるっていうね。こういう状態があるんでね、もう本当に、この医療体制を考えないと、社会保険の問題を含めて俯角すると…」

用田「だから、この題に戻ると、自衛隊も戦えないということです」

水島「そういうことですね」

用田「日本人は戦えないにしようと」

水島「はい、というようなことがあって、今、皆さんから出て具体的には戦う意志のある人が居るかも分かんないけども、実際には真面に戦えないっていうことですね。具体的には、今の弾薬から何から全部含めてシステムで」

用田「敵は身近に居るってことです」

水島「そうですね」

用田「それを頭に置いて作戦をやらなきゃいけないっていうことになりますね」

水島「それと、もう一つ、私は自衛隊に対して愛着を持っていますけど、信頼できる自衛隊の人が秘かに言いましたけど、半分は本気で愛国的な人が居ると。でも半分は、いざとなったら、もしかしたら逃げるかも分かんないって言われましたけどね。どうでしょうね、あまり言えないでしょうけどね」

矢野「それは国民一般と同じような影響下にあることは間違いないので、今、言われたことが一般の方よりは遥かにやろうという人は高いと思いますけど、居ないとは言えないですね」

水島「そうですね」

矢野「えぇ」

水島「はい」

矢野「だから、それは、私もさっき申し上げたように、軍としての本来の何を守るかということについての正面切った議論がされてないと。一般的な民主とか平等とか人権とかっていう戦後的な憲法で言っている価値観で一括りにしているんですけれども、じゃあ、本当に、家族とか郷土を守る、国を守るという時に、それで、みんな、納得して腑に落ちてやるのかということですね」

水島「そうですね」

矢野「だから日本には、やっぱり伝統がある訳ですから、そこは旧軍の場合は、しっかり伝統を踏まえて文化を研究し尽くして、やっぱり建軍の本義から軍人勅諭というのが出ている訳です」

水島「そうですね」

矢野「だから、あれだけの精強さを発揮できて最後の一兵まで実際、戦った訳ですね」

水島「そうです、そうです」

矢野「特攻隊も出た」

水島「うん」

矢野「それは、やっぱり日本人の民族の魂と一体だったから、みんなは戦うということに、何の悔いも無く徹しられた訳です」

水島「全くそうです」

矢野「だから、それが今の自衛隊で出来るのかって言うと、私は、そこは曖昧にされている以上、そういう意識を持っている人はやるでしょうけど、そこが曖昧な人はついていけない」

水島「はい、そうだね」

矢野「それは一般国民と一緒だと、私は思います」

用田「だから尚更の事、国軍にしなきゃ駄目ですよ」

水島「うん、やっぱり絶対にそれですよね」

用田「国軍にして、その時に今の自衛隊の先生みたいな先生じゃなくて、ちゃんとした先生。この国を愛し、この国をという話にしないと根本が居なくなる。でも、私は楽観的に言って申し訳ないですけども、若い隊員は中々立派な奴が多いですよ」

水島「あぁ、そうですか」

用田「海外派遣なんかを見ても、う～ん、亡くなった方でもゴロゴロ転がったら可哀想だからと言って、自分の腕に寝かせてトラックに乗って来たのも居るんですよ」

水島「うん」

用田「だから、日本人の若い奴も大したもんだなと思いますね」

水島「う～ん」

矢野「だから日本人としての精神性と言うか、それは、日本に旅行に来る外国の観光客の人が非常に清潔で秩序正しくって、みんな親切にしてくれると言われるんですけど、そういう日本人の基本的なメンタリティとか生き方は何も変わっていないですね。文化の基底にあるものは。だから、それを国家という名前にした時にアレルギーを植え付けて、反国家が正しいんだ、反権力が正しいんだと、ずぅっと教え込んできたのが戦後の日本ですから」

水島「そうですね。それを８０年間やって来た訳だから」

矢野「その洗脳工作が、かなり行き渡って８割９割がそれに毒されていると」

水島「まぁ、そうですね」

矢野「だけど若い人から段々それから徐々に解けて来て、だけど、どうしていいか分からないから何か指針を示してくれ、教えてくれ、導いてくれっていうのが、今の若い方の気持ちじゃないかなという風に思いますけどね」

水島「いやぁ…」

矢野「やる気はある」

水島「伊藤さん」

伊藤「はい」

水島「日本の状態は、こんな状態だっていう話になっているんですけども」

伊藤「はい」

水島「まぁ、もう一つね、我々が自立しなきゃいけない、そのアメリカですけども、まぁ…」

伊藤「はい」

水島「やっぱり、今、トランプになってもバイデンが再選されても、混乱というか下手したら内乱まで行くんじゃないかとか言われていて、アメリカ自体がバラバラになるんじゃないかと言われていますけど、この辺、我々の対日関係も全部、アメリカが風邪をひけば、こっちが肺炎になるみたいな言い方されますけど、アメリカの状況っていうのは今、客観的に見ると、どうですか」

伊藤「もう、これはジェイソン・モーガンさんもよく言われていることですけれども、アメリカ人は自分達がどういう生き方をしたらいいのか、自分達がどういう価値判断を持ったらいいのかということが分からなくなってきているんですね」

水島「なるほど」

伊藤「日本が滑稽なのは、日本自体が、所謂、アイデンティティ・クライシスと」

水島「うん」

伊藤「自分達のアイデンティティ、自分達は何者かというアイデンティティ・クライシスを起こしているんですけれども、アメリカ自体がアイデンティティ・クライシスを起こしている訳ですね」

水島「うんうん」

伊藤「アメリカという国は、元々キリスト教徒が神の国を創る為という理屈をつけて１７世紀の初めに創り出した国で、その時にはキリスト教的な人間観、世界観と、それからアングロサクソン的な政治文化、ポリティカル・カルチャーがあった訳です」

水島「うん」

伊藤「でも今のアメリカは、もうキリスト教、本物のキリスト教徒ですね、所謂、エヴァンジェリカル・クリスチャンとか、へんてこりんな人間は別として、要するに、共和党のクリスチャン・ファンダメンタリストとか言われる人達は別として、本物のキリスト教徒、本当にキリスト教を理解してキリスト教の人間観、世界観を実践している人っていうのは極少数派であると思います」

水島「あぁ〜…」

伊藤「ですからキリスト教的な価値判断は、もう失っています。勿論、最近の十数年間は、人口増加の半分以上が非白人ですから」

水島「そうですね」

伊藤「当然のことながらアングロサクソンである訳が無くて…」

水島「うーん…」

伊藤「今のアメリカの国内政治は、アングロサクソン的なポリティカル・カルチャーっていうのが失われています」

水島「うん…」

伊藤「ついでに申し上げますと、今のイギリスも失われていますね」

水島「なるほど」

伊藤「イギリスの国内政治も酷いもんです」

水島「う～ん」

伊藤「そうすると、そういうアメリカにしがみついて、拝米保守、アメリカを崇拝して、アメリカの全部、猿真似して喜んでいる日本人っていうのは、要するに、アメリカ人自身が形而上的な価値判断を持てなくなった人達なのに、そういう形而上的な価値判断を持てなくて目先のプラグマティスティック的な損か得かと、もしくはユーティタリアン、功利主義的な目先の役に立つか立たないかと、そういう判断だけで動き回っている。だから、アメリカ人は権力欲と覇権欲が強いんですよ。だから一見、ダイナミックで凄そうに迫力があるように見えますけれども、ものの考え方自体っていうのは形而上的な価値判断がすっぽり抜けておりまして、これはトクヴィルも言っているんですけれども、世界の中でアメリカ人ぐらい金に執着している人間は居ないと」

水島「なるほど」

伊藤「もう世界中の国で、いつも金の事ばかり考えて、金の事ばかり喋っているのがアメリカ人だと。金を儲ける事ばっかり」

水島「うん」

伊藤「もう一つトクヴィルが言ったのは、アメリカ人ぐらい哲学、もしくは哲学的な思考力というものが欠けている国民は居ないと」

水島「うん」

伊藤「そうするとアメリカ人っていうのは英語で言うと Most Materialistic and Least Philosophical と」

水島「なるほど（苦笑）」

伊藤「最も物質主義的で、もっとも非哲学的な国民であると。僕がいつも感じるのは、拝米保守、アメリカを崇拝して猿真似して喜んでいる日本人を見て思うのは、要するにアメリカ人自身がそういう哲学的、精神的に貧しい状態にあるのに、それに日本を合わせて、アメリカの真似すれば上手くいくと」

水島「うんうん」

伊藤「これは、もう、そういうことを言っていたら、あの拝米保守っていうのは、ハッキリ

言って凄く悲劇的だと思います」

水島「そうですね」

伊藤「それで、ついでですけど、ちょっとご紹介致しますと、アメリカの雑誌に American Conservative という雑誌があります」

水島「うん」

伊藤「これはグーグルでも何でもいいですから、サーチエンジンに American Conservative と英語で書き込んでみて、その５月に出ている記事を見ると、ジェーソン・モーガン先生の Why is Japan so in Hocked Washington’s Establishment というエッセイが出ているんですね」

モーガン「知らなかったです」

伊藤「要するにジェイソン・モーガン教授が、アメリカの猿真似をしてアメリカに媚び諂うことによって、何か自分が凄いことをやっているような日本人の事を、実名を何人も挙げて…」

水島「(笑)」

伊藤「厳しく批判されておられますから、皆さん、英語を読むのが面倒臭くない人はジェイソン・モーガン教授の American Conservative に載った、この英文のエッセイを是非、お読みになって下さい」

モーガン「恐縮です。どうも」

水島「そうですね。翻訳機も今、大分、良くなっているからね。あぁ、今、丁度、せっかく言ってくれたので紹介します。３０年前の西部邁さんの『破壊主義者の群れ』という文章を丁度、うちの仲間が送ってくれたので、ちょっと読むと『ここ数年に渡って、徐々に目立ちつつあるのは反左翼の輸送に使って来たマスコミ人士が多分、それと自覚せぬままに売国奴と呼ばれてもしょうのない言動に及んでいるという事実である』と。これは今そのものなんですけど、これ、西部さんが書いたもので３０年前ですよ。

『親米主義者達は、その精神の故郷がアメリカなものなので日本のルールに文句をつけっ放しのアメリカには文句を言わないことにしているばかりか、ボーダレスの時代に合わせて、日本のルールを世界に合わせよと日本人に迫る。そして、その世界たるやイギリスでもイタリアでもなく中国でも韓国でもなく、ケニアでもウガンダでもなく、要するにアメリカなのだ』というようなね。これはグローバリズムのことを言っているんだろうけど３０年前なので、私は懐かしく読んだんですけどね。本当に、そういうことをずぅっと昔から言っているけどね。

我々は、この轍をずぅっと３０年も踏み続けているっていうことだと思います。今、本当に、この問題でアメリカがそういう状態だっていうのは、やっぱり知る事が凄く大事だと思いますよね。岸田さんが親分と崇めて言う事を何でも聞いているエマニュエルにしろ、バイデンにしろ、このネオコンの人達の流れの中で、今、９兆円っていうのがあったじゃないですか」

室伏「はい」

水島「更に、もうちょっと日本に置いているロシアの凍結資産。全部、ウクライナから出せと言われているんですよ。これねぇ、ロシアから言ったら、あとで返せって言うか、泥棒って言われて、またチャンバラが始まるね」

モーガン「はい」

水島「こういうようなことが本当に平気で、どんどん進んでいるっていうことがあると思います」

モーガン「はい」

水島「そういう意味で、この自衛隊は戦えるかって言うと、今の状態では本当に短い時間は、弾薬の問題もあって戦えるかも分かんないけど、それと、もう一つ、誰でもそうですけど、もう将官なのでお聞きしたいんだけど、指揮官は、やっぱり岸田さんじゃないですか。最終的には防衛出動とか彼がやる訳でしょ。それは、どうですか。今、その下に居た軍人さんね、一応、総司令官ですよ、今はね、あの人が。天皇陛下じゃないですから。これ、本当に岸田さんが、じゃあ、これから戦いましょうって、いや、簡単に言うと、今、フィリピンのニュースで聞いたら、フィリピンの民間船が１００隻、中客船４隻と共にスプラトリー諸島へ行って食糧を運ぶ。つまり、我々が１０年前に２０隻、漁船を仕立てて尖閣諸島へ行って、私、上陸しましたけど、そういうようなことをやっているのは、今、フィリピンがやっているんですよ。

でも日本は、私達を行かせてくれないんですよ。問題が起こるから行くな。これが本当に今の日本政府の姿。だから尖閣諸島に中国船が１００隻来て、上陸したら、どうします？」

矢野「はい、いいですかね。尖閣の問題については、自民党が野党に居る時は、公務員を常駐させると公約で言ったんですね」

水島「はい。そうですよ」

矢野「だけど、いざ政権を奪還したあとはやらない」

水島「はい」

矢野「管理を強化して、海上保安庁が周りを固めて一般人を行かせない」

水島「はい」

矢野「そもそも今は出港段階から、漁猟の資格を持った人しか許可が出ません」

水島「はい」

矢野「だから、もう一般の人は全く行けないんですけれども、そういう風に管理強化しているということは、ここから先は憶測になるんですけども、私は単に日本政府の決定ではないと」

水島「いや、あのう…」

矢野「自民党が野党の時に公約していたことをやる訳ですから、当然、石原都知事のあとを受けて、野田内閣が国営化に、もっていって国有地として買い上げた訳ですけれども、そうあれば公務員の常駐をやるべきですけどね。それをやらなかったということは、私は、やっ

ぱりアメリカの圧力であろうと思います。アメリカは最初に話が出たように、中国と事を構える気はない。ましてや日本の無人島の為にアメリカの兵士の血を流す気は全く無いです」

水島「そうですね」

矢野「日本が互譲対象になっているということで、今回もそれが約束されたということですけれども、これは従来の姿勢と一歩も進んでいない訳で、互譲対象になるっていうことは、公務員の常駐だけでは不充分で、これは行ったって、丸腰だったら排除されるんですね。で、排除されて、彼らは不法入国の扱いで海警だけじゃなくて官憲を送り込んで、逆に、それをいいことにして、実効支配の既成事実化を図ると思います」

水島「うん」

矢野「それをやられたら、今度は、日本側は奪還をするということで統合作戦をやらなきゃいけないんですけども、それを一番避ける方法があるんですね。自衛隊を島に置くことです」

水島「全く、その通りです」

矢野「何故かと言うと、自衛隊を置けば、これは直ちに戦争行為になりますから、これは、自動的に互譲対象になるんですよね」

水島「全くそうです」

矢野「そうすると、アメリカも動かざるを得ないし、政府も防衛出動の下令を直ちにやらなきゃいけないということになる訳ですよ」

水島「はい」

矢野「だけど、それだけのリスクを冒す覚悟も無いし、アメリカから圧力がかかっているから出来ないと」

水島「そういうことですね」

矢野「そういう構図ではないかという風に、私は見ています」

水島「全くその通りです」

矢野「だから自主国家として領土主権を守るというんであれば、当然、軍隊を置くべきだと、つまり自衛隊を置いて、その軍で支配するということは、実効支配の最たるものですから、だから、そういう実行する処置を執れば、逆に中国も簡単に手出し出来ないんです」

水島「いや、全くそうです」

矢野「これは日本国としてアメリカと戦争することを覚悟しなきゃいけない。それは、中国だって望まないということであれば、米中間で、そういう密約があるんであれば、逆に日本がそこに楔を打ち込んで、その密約を逆手に取って、この尖閣を守ると同時に尖閣を基にした米中の干渉を未然に防ぐと。この固有領土としての実効支配を固めるということが出来るはずですよ。これをやろうっていうのは、もう正に政府の決断次第です」

水島「そうですね」

矢野「実際に防衛出動するかどうかについては、今回の平和安保法制によって、実際はハー

ドルが更に高くなっている訳です」

水島「うん」

矢野「というのは、受けた時、この国防の基本方針として、まず、国家安全保障会議にかけて諮問して、それを受けて首相が決断して、そのあと閣議決定をして、それから、更に国会の承認を得るというシステムになるんです。国会承認は、あとでもいいという話はあるんですけど、閣議決定するまでに、また基本方針の承諾を貰うとか国家安全保障会議にかけるという必要性まで出て来ているということは、従来よりも更にハードルが高くなって時間がかかるということです。だから態と、そういう仕組みにしているということは、更に防衛出動がかけ難い。その間に既成事実をつくられるという危険性が無人島のまま放棄しておくと、いつか来ると」

水島「全くそうですね」

矢野「もう、これは時間の問題だと思います」

水島「はい。これは、ひとつ事実として言っておくと、今、『だろう』って言いましたけど、私がある政治家に聞いたところ、オバマが安倍さんに日米会談を開くなら、公務員の常駐と公安施設の整備、あの自民党の公約をやめろと」

矢野「あぁ、やっぱり」

水島「それがあったんで行かないと、行けないと」

矢野「うん」

水島「それから中国側からの要求では、私とか仲間さんって向こうの議員さんも居るけど、こういう者も行かせるなというような形で、現実的には、そういうようなことがあって、前にも一回、公開したことありますけどＮＳＣの内部文書ですね。課長級の会議の文書で、中国の公使が、こういう我々が行くようなところへ行くんで、行かせないようにしてくれと正式に申し出て来た。それで、どう対応するかっていう内部の文書が、誰からって言ったら言えませんけど手に入れたんですね。それをお見せようかと思います」

用田「大丈夫ですか、それ」

水島「えぁ、もう２回ぐらい出していますから」

用田「そうですか」

水島「まぁ、名前は消しています。一応、出席した課長の名前はね。ただ、こんな程度だっていうね。だから、そのぐらい、うちの国は本当に情けないって言うか、何か中国の公使は淡々と穏やかな調子でしたって、別に怒った様子は無かったみたいなねぇ、みんなが言っているのは、それでどうするんだよぉって言って、みんなでやっている」

用田「私は今、矢野さんのおっしゃったことに基本的に流れは同じですけども、ただ自衛官を、そこに置くなら、それは基本的に閣議決定を先にちゃんとして、所謂、来た船が手を出せば撃つと」

水島「うん」

用田「対艦ミサイルと、所謂、そういうやつと。尖閣を飛ぶ訳ですから」

水島「はい」

用田「尖閣まで全部、範囲に入りますから、基本的に、その時には、我々と交戦するということをちゃんと明示して自衛官を送ってやらないと、自衛官はその時、無駄死にですからね」

水島「はい」

矢野「あぁ、それは、おっしゃる通りですね」

用田「ね。だから…」

矢野「平時の自衛権を」

用田「いや、だから戦争を…」

矢野「やらなきゃ」

用田「あぁ、そうそう、そう。平時の自衛権っていうか、もう本当にやると」

水島「まぁ、そうですね」

矢野「警備権限をね」

用田「はい」

矢野「はい」

用田「完全にやると」

水島「いや、それと、もう一つはね、今、矢野さんがおっしゃったけど、先に向こうがやられて先に中国が占拠しちゃったら、今度は奪還作戦になるんですよ。ということは、我々が奪い返すっていう形は非常に不利になる。今、矢野さんがおっしゃったように、自衛隊でも何でも居たところに中国軍が来てやれば、俺達の土地を奴らに奪われたって言えるじゃないですか。でも、今は何もやっていないから、中国軍にしろ中国の民兵にしろ上陸しちゃって住み始めたら、それを自衛隊が排除するとか何かやったら奪還作戦になっちゃう」

矢野「彼らは敵国条項を適用して侵略国だと言いますよ」

水島「うん、言うでしょ」

矢野「言いますよ」

水島「そういうようなことがあるから」

用田「また自衛隊は軍隊でないと、こうするんです（苦笑）」

矢野「いや、活動家という話になりますよ」

水島「はい、これです、はい」

用田「結局、最終ラインまで行くんですよね」

矢野「そう」

水島「はい」

用田「最終ラインまで」

水島「ちょっと見て下さい『尖閣諸島事案の対処に係る課長級関係省庁連絡会議。国家安全保障局、外務省中国モンゴル第１課、外務省総合外交政策局総務課、海上保安庁警備課領海警備対策室、防衛省統合幕僚監部、これの課長が、みんな来ているんですよね。ここに参事官。この司会の下に、こういう形で３日、仲間市議が漁業活動を行うということなので会議を開かせて戴くというようなことでやっていると、こういう話をすると。外務省が色々説明しているんですけど『先に事実関係を説明させて戴く。昨日、午後１０時半頃、中国大使館の律桂軍（リツケイグン）公使参事官から申し入れがあった。尚、口調は淡々としており、普段の申し入れに比べて、特に変わった点は無かった。申し入れの要旨は、仲間市議が政策会議で何らかの活動をする情報に接していると。また海保の船も、それに合わせて出航態勢を整っているとのこと。貴国は有効な措置を執り、それらが行われないようにして貰いたい』

モーガン「わぁ～」

矢野「露骨だなぁ」

水島「平気で申し入れているんですよ」

モーガン「わぁ…」

水島「それも受けているんですよ。これがＮＳＣとか国家安全保障局の課長って、みんな、それぞれに実務担当のそこそこの奴ですよ。局長がその上にあるんだけど、この連中がこれだけ雁首揃えて、中国公使の姿勢は淡々として穏やかだった。怒ってはいなかったとかね。で、何とかならないかって言って、あぁだ、こぅだやっているんですよ。そうそう、何とか審議官が海保に昨日の面談では出航中止を要請したのか。海保：いやあ、根拠がないので中止して欲しいとは言っていないが『中国公船が尖閣海域にいるので今は止めて欲しい』とは伝えた。

というような感じでね。もう本当にこれが現実で、まぁ、仲間さんも私達も同じ、もっと私に対しては厳しいです。水島は行かせるなと。活動家だからっていうね。漁業者ではないみたいな言い方で、私は漁業者ですよ。第一さくら丸という船を持っているオーナーだし２０回も尖閣海域へ行って漁業をやっていますから。従事者であることは間違いないです。

というようなことで、これね、また何処かで全文、公開してもいいと思っているんですけどね。こういうようなことが本当に実際、行われている。こんなの見ると情けなくて私は涙が出そうですよ。雁首揃えて、いい時間、高級官僚…」

矢野「竹島の時も同じような経過です」

水島「あぁ、そうですか」

矢野「竹島も」

水島「竹島もね」

矢野「はい」

水島「だから、日本は、そういう状態ですよ。もう、これを変えなきゃいけないっていうことは本当に、ということなんですけど、時間になってきましたので、それぞれ一言ずつ戴いて終えたいと思います。まぁ、でも現実の話をお聞きできて本当に良かったんじゃないかと思いますけど。じゃあ、矢野さんからお願いします」

矢野「私は、日本が独立主権国家として再生するには最後のチャンスだと」

水島「はい」

矢野「ここで改めなければ、日本は本当に滅びると思います」

水島「はい、有難うございます」

矢野「以上です」

水島「用田さん」

用田「はい、同じように、国家主権というのは生殺与奪の権をしっかり持っておくことだと、それは外交と防衛だと」

水島「はい」

用田「今、それをやらないと、もう、あとは無いという風に、同じように思います」

水島「そうですね」

用田「今の尖閣の話もそうですが、これは基本的に取ったり取られたりっていう話以前ですけれども、尖閣が我が国の領土ならば…」

水島「うん」

用田「基本的に我々は、それに対して取らせない態勢を執るし、それに対しては完全に反撃する態勢が出来ています。そして取られたら、こういう態勢で反撃をしますと」

水島「そうですね」

用田「だから、所謂、先程、申し上げたように船を沈めるシステムは、いくつも持っている訳で…」

水島「そうですね」

用田「それで、我々は立ち向かいますと、それを閣議決定しろということです」

水島「全くそうです」

用田「それをやった状態でないと先程、言ったように尖閣に行って、こうしなさいとかいうのは中々出来ませんし、この前もちょっと申し上げましたが、トマホークの弾が第一攻撃用だったら、そこに、いっぱい撃ち込めと。１５００発あるんだから」

水島「腐る程、あるんだからねぇ」

用田「それは、その時に日本の判断でやるかアメリカの判断でやるかという作戦統制というところが出て来る訳です」

水島「あぁ、そうですね。それは大事ですよね」

用田「その時に、これは日本がやるという風に決められなければなりませんよね」

水島「はい」

用田「それから、もう一つ、あまり沢山、言ってもあれなんですけども、研究開発組織っていうのは、私はずっと言っておりましたけども、この秋にはダーパ（ＤＡＲＰＡ＜Defense Advanced Research Projects Agency＞）と言って、アメリカはハイリスク、ハイリターンしかやらないと」

水島「うん」

用田「そういう研究機関があるから、世界一を目指すというダーパともう一つのシステムを入れたのが日本に出来るんですよ」

水島「あぁ、いいですね」

用田「官民を入れて。だから、これに非常に期待をしています」

水島「はい」

用田「同時に、そこで同じ敷地とか近くにアメリカの大学、マサチューセッツ工科大学が来るんですよ」

水島「あぁ、そうですか。ちゃんと、それを吸収して…」

用田「一緒になっているんですよ」

水島「う～ん、凄いですねぇ」

用田「だから、しれぇ～っと、間違ったらごめんなさい。でも、やっぱり大学が同じような近辺、ご近所様に来るような感じですよ」

水島「なるほどねぇ」

用田「ということは、それが出来たら、考えたことは戴きますからねと」

水島「そういうことですね」

用田「これはね、許しているっていうことは、日本には技術として全然勝ち目っていうのが無い訳ですね」

水島「う～ん、そうですねぇ」

用田「ただ、もう一つは、あまり現役の事は言えませんけども、基本的に自衛官の中にも賢い者が居ましてね、今のウクライナの紛争を見ながら、電磁波だとか色々なことを含めて、頭が凄く進んでいるのが居るんです」

水島「あぁ」

用田「私は、そういう者に期待します」

水島「そうですね。期待したいですね」

用田「そういう将軍もちゃんと居る」

水島「はい」

用田「だから問題は、あとはトップのレベルが決断をする時に、そうじゃなくて、こうしますという風に言えるかどうかですけどね」

水島「うん」

用田「そこは、もう一つ壁があるんだろうと」

水島「そうですね」

用田「もう一つ、言わせて戴くと自衛隊は戦うのか、自衛官は戦うのか、自衛官は戦います」

水島「はい。そうですね、はい」

用田「特攻の時もそうじゃないですか」

水島「そうですね」

用田「大きな大義っていうやつは勿論、要りますよ」

水島「はい」

用田「大義名分は要ります。それがないと人間のハートは壊れるんです。戦闘神経症になる要素の一つが、大義名分がないということです、大義名分はあるんです。国土防衛ですから」

水島「うん」

用田「だからお母さんとかお父さんを守るんだという気持ちだけでもいいです」

水島「うん」

用田「そういう気持ちを持てる人間が集まって来ればいいんだけども、それは社会の情勢を受けるということ、その通りなので、日本人として当たり前の教育をしましょうと。だからグローバリズムと反グローバリズムだけども、反グローバリズムというのは反グローバリズムと付いているから抵抗勢力みたいに見えちゃうんだけど（苦笑）、本当はこっちの方が主体で…」

水島「これが自分の国を主語にするんですね」

用田「そうです。国家、民族、国民」

水島「うん」

用田「まぁ、日本では国体、そして人間性、人間性ですよ。これを大切にするのが反グローバリズムであって、それがグローバリストという仕掛けに対して立ち向かおうと」

水島「うん」

用田「今は少数勢力ですよ」

水島「うん」

用田「やっぱり、グローバリストは金を持っているから勢いが強いですよ。言論も抑えられるし、だけども我々は正統派だと。だから、そういう意味に於いても、ひとつも揺らぐことは無いと思っているんですが…宜しくお願いします（笑）」

水島「頑張りましょう（笑）。いや、そういう用田さんみたいな方が居るというのが本当に頼りになると思うので」

用田「いやいや。今日は涙腺が緩いもんですから駄目ですよ（笑）」

水島「でも、そういう気持ちが無いと駄目ですよ。何故、戦うかって言ったらね、前も紹介しましたけど、私が大変、尊敬する文芸評論家は、日本軍が世界一強かったのは、よく泣く兵隊だったからだと。勝っても泣き、負けても泣き、家族の為に泣き、国の為に泣き、この世の中の無常を泣き、涙こそ、日本兵が強かった理由だと。そこを東条英機さんは誤解したと。ドイツ風の武断主義みたいな、男らしくないって言ったけど、実はそうじゃないんだと。

平家物語を見なさい。保元物語を見なさい、太平記を見なさい。みんな、別れとか泣きながらね、でも雄々しく戦う。これが日本の侍の姿だったっていうことも言っておきたいと思います。有難うございます。はい、では、室伏さん、お願いします」

室伏「はい。まず、今のお話がせっかくあったので、じゃあ、そこに繋げてから話したいと思いますけど、まず、今、おっしゃっていたグローバリズム対反グローバリズムです、今の言い方で言えば、グローバリスト対国民主義者ですね。国民主義」

水島「うん」

室伏「実は、もう、この対立の構図はヨーロッパでかなり明確になっていて、国民主義政党、よく日本でも、それからヨーロッパのメディアでも、よく極右とか右派って言われるんですけど、その国民主義政党が今、かなり強くなってきて」

水島「そうですね」

室伏「えーと、来月でしたね、僕、７月だと思ったら来月の欧州議会選挙では国民主義政党が過半数を占めるだろうとは言われています。なので、あの手この手で悪いイメージを付けること、それから集会をブリュッセルでやっていたら、それをブリュッセルの市長が禁止して解散命令するという訳の分からないことになっているとか、マーンさんが、よく、おっしゃっていますけど、ドイツのシュルツもドイツの為の選択肢っていうのを悪者扱いするっていう馬鹿なプロパガンダをやるとか、でも、それでも欧州では完全に国民主義っていうのは、どんどん強くなっている。アメリカでも、ひとつの象徴、トランプでありますけども、国民主義、アメリカニズムというのが強まっている。日本はどうですかって言ったら、国民の意識の中には国民であるとか国という意識がどんどん減退していってしまっている」

水島「はい」

室伏「政治のレベルはどうですかと言ったら、もうグローバリズムとか新自由主義がいいというような発想になってしまっていると。この状況の中で、どうやって国防を考えられるんですかと。やっぱり橋頭堡としての国民主義政党、やっぱり勃興はしていますから、それをね、保守を名乗りながら、実は蓋を開けてみたら、ただのネオリベっていう人も居ますけど、居ますけど、何処とは言いませんけど御想像通りですけど、居ますけど、それ以外のところで、やっぱり橋頭堡となるような国民主義政党って育っていますし、そういう意識を持った

人間っていうのは今、与野党を問わず居ることは居るので、やっぱり、それを糾合して行こうって、さっき、おっしゃっていた話って、絶対、やらなきゃいけないなという風に思っています。それが、その先に本当に戦える自衛隊というよりも日本軍ですよね」

水島「うん」

室伏「国軍が、やっぱり育って行くというか再編されていくんだろうなぁという風に思っています」

水島「うん」

室伏「それで、ちょっと個別の話ですが言おうと思って言えなかったので、それを今、ササササッという風に申し上げたいと思うんですけど、まず、ひとつ目が離島防衛の貧弱さのご指摘がありました。警官二人しか居ないっていう話。例えば、そういう所に自衛隊を置きましょうとか、もっと人を住ませましょうとかと言うと、例えば、某野党の、まぁ、新潟の衆議院議員さんですけどね、昨日、たまたま僕が会館の下ですれ違ったら、僕から目を逸らせて行っちゃいましたけど、その方は（失笑）そんな所に置く必要は無いと。

そんな所に住む必要はないから、そういう人間は、もっと便利な都会に住めばいいと言って離島なんか無人島でいいのだみたいな発想ですね」

水島「能登がそうだよねぇ」

室伏「結局、これは何かって言うと、新自由主義の発想。そしてコスパ思考ですよね」

水島「うん」

室伏「でも国防とか安全保障というものは、そもそも国というものを、所謂、倹約のコスパで考えちゃいけないですけど、その思想というものが野党中心に自民党の中でも、やっぱり蔓延してしまっていると。やはり、この現実は考えなきゃいけないし、それに対しては、徹底的に反論だけじゃなくて、僕は、はっきり言いますけど糾弾していかなきゃいけないと思いますよ」

水島「うん、うん」

室伏「究極の糾弾は何かって言うと、そういう議員を次の衆院選で落とす事」

水島「うん」

室伏「二度と議員になれないようにしてあげることですね。まず、これをひとつ言っておく」

水島「うん」

室伏「兵器の話があって、ドローンをよく使うようになりましたっていう話があったんですが、じゃあ、日本国内で空撮とか何とかじゃないですよ、ちゃんと国防に使えるドローンって今、作られているんですか。そんな体制が今、あるんですかって言ったら…」

矢野「まぁ、やってはいます」

用田「やっています」

矢野「あります」

室伏「でも、まだまだ、これから、やらなきゃいけないですよね。ところが…」

矢野「いうだけで、国産では…」

用田「国産であります」

矢野「ロシア製ドローンのエンジンもカメラも通信機も全部、日本製です」

用田「でも、あれは改善して、あぁ、そうそう、そういう意味ですね」

矢野「元々ね」

室伏「いや、いいお話を聞けて良かったんですけど、だとすると、やっぱり国が率先して、公共調達によって、どんどん買い上げて、始めは自衛隊だけじゃなくて、いいですよ。海保も使いましょう。警察も使いましょう。消防も使いましょうとか、各都道府県に全部、買って分けて下さいと」

水島「うん」

室伏「山間地域の防災とかに使って下さいとか、色々なやり方があると思うんです。要は、何が言いたかったかって言うと、国が率先して、ずぅっと継続的に調達することによって、生産コストを抑えて、尚且つ、それによって企業の防衛産業が、より、いいものを造れるようにしましょう。これは、さっきおっしゃっていたアメリカが正にダーパを中心にずぅ〜っとやっている訳ですよね。だから日本がやらなきゃいけないんですけども、残念ながら、財務省の人達というのは、日本製と外国製がありましたと。どっちが高いですか。日本製です。安いのは外国製ですか、じゃあ、安いからこっちを買いましょうと。これは本当に財務省主計局の防衛担当の主計官のお考えです」

水島「あぁ、そう…」

室伏「これで国を守れますかって言ったら、やっぱり、これはね…」

水島「これじゃあ、駄目だねぇ」

室伏「奴らは、そういうザイム真理教の人達ですから、いいですよ」

水島「うん」

室伏「だけど、そこをちゃんと政治家が徹底的に、ふざけんじゃねぇという風にして、ある意味、別に物理的にやる必要は無いですけど徹底的に締め上げてやるということぐらいやらないと」

水島「そうですねぇ」

室伏「役人はビビりですからね」

水島「なるほど」

室伏「だから変わらないですよね。それは絶対にやらなきゃいけない。そういう意識は持って下さいと。別に僕は物理的にやれとは言っていませんけどね。はい、繰り返しますけど」

水島「はい」

室伏「それから、今、新自由主義と緊縮の話をしましたけど、今、ずぅっと、このままね、金融緩和をもう止めろという、金利も上げろという話をする。これを今、やったら、今朝、発表されたＧＤＰ速報で今年１－３が予想通りマイナスでしたね」

水島「うん」

室伏「特に内訳を見ると、外需は弱くなっていますねとか、消費は、どんどん減退していますねって、これは、もう危機的状況ですね。国の経済は外需依存度が高まれば、海外の景気によって、かなり景気が変動する事になるんですが、かなり、そういう経済って脆弱な経済ですよ」

水島「うん」

室伏「だから脆弱な経済でもって国を守れますか」

水島「うん」

室伏「新自由主義によって、先程、簡単に言えばコスパ思考とか、そういうものによって、国を守れますかっていう」

水島「うん」

室伏「やっぱり、これは国防を考えるんだったら転換させなきゃいけないし、緊縮財政だからこそ充分な兵舎がないとか、自衛隊の方々の給料が安いと。まぁ、ちょっと、すみません、お二方を前にして、こういう言い方をしたくないですけど、やっぱり衣食足りて礼節を知るですから、充分な手当を貰えなかったら自衛官の士気も落ちちゃうと思うんですね。だから、僕は、やっぱり自衛官の給料を上げていく。しかも、それを、だったら他の公務員の給料を削りますとか他の何かを削りますじゃなくて、みんな、上げていくということをちゃんとやらなきゃいけない。その為にも、やっぱり緊縮財政を打破しなきゃいけないと」

水島「そうですね」

室伏「あと、もう一つは、先程、休憩中に話をしましたけど、今の子供達、若者達の教育っていうものが、国を考えないとか我慢強くならないとかね、解り易く言えば最近、ゴールデンウィークがありました。終わって、また、会社に戻りますとか出勤しますって言ったらゴールデンウィークから戻ってきたら、もう無理って辞めちゃう若者が多いと。

これも完全に忍耐とか、そういうものを学校教育で教えて来ない。別の言い方をすれば、子供を幼稚園児のまま大人にさせるような教育、まぁ、実際、下村治が『日本は悪くない、悪いのはアメリカだ』のなかの、最後の方で、日本がそういう国民意識と国民経済意識を持たないようにしたものは何かって言ったら、日教組でありアメリカに押し付けられた教育なんだっていうことを、はっきりと書いています。

やっぱり、これも転換していくっていうことをしないと、みんなで国防議論をするとか、正に言った郷土防衛隊構想みたいなものをやろうと思っても手を挙げる人が居なくなっちゃいますよね」

水島「うん」

室伏「人が居ないんだったら、どうするんですかって、じゃあ、移民でという発想が、今の

岸田政権ですからね」

一同「（苦笑）」

用田「アメリカ、移民を入れようとしているんですよね、最近ね（苦笑）」

モーガン「そう」

矢野「国際的な圧力」

室伏「だから、いや、言えなかったことを最後にバタバタバタッと申し上げましたけど、やはりポイントを抑えて、これから本当に国民が国防について、侃々諤々と議論できるような状況は作っていかなきゃなと思いますね」

用田「すみません、せっかく言って戴いたんで、ちょっとだけ」

水島「はい、はい」

用田「食については、自衛官、実に、みじめです」

室伏「はい」

用田「段々、低く、こんなんなって来ているのは、実にこれかよという感じ」

水島「あぁ～」

用田「自衛官は、お金の話をあまりしたくないし、しないけども」

水島「うん」

用田「まぁ、ＯＢですから言わして戴くと、こんな食で、やっとられるかいというのは当然、あります。国軍でないという面もありますけどね。それと無人機のやつ、国産がありまして、最初、アメリカのやつを入れたんですよ。民間からやったものを。ところが何故、駄目になったかと言うとメンテが駄目です。メンテナンス」

室伏「うんうん、うん」

用田「結局、そこで金を釣り上げるんですよ」

室伏「あぁ～、はいはい、はい」

用田「だから結局、同じですね」

水島「うん」

用田「そういうものを入れたとしても。だから国産ですよ。ウクライナの悲劇を見ると、国産じゃないという部分があるじゃないですか。だから我々は国産にしないとウクライナよりも、もっと酷い目に遭うと」

水島「使い物にならないってことね、はい」

用田「はい。すみません、とりあえず…」

矢野「安保三文書っていうのは、人の問題については自衛官のソースは増やさないという前

提ですね。これが本当に馬鹿げているんです」

水島「そうですねぇ」

矢野「人や物が一体になって初めて戦力になるんです。一番、時間がかかるのは人ですよね」

水島「いや、全く、そうですね」

矢野「それについての認識が全く無い。処遇改善もその一端ですし、やっぱり人を集めることは、募集費がないんじゃなくて努力していないから集まらないんです」

水島「いやいや、その通りだと思います」

矢野「それは世界平均からして、とんでもないです」

用田「はっきり言って陸上自衛官を減らしているんですよ」

矢野「そうですよ。２千人を転用しろと言っているんだから」

用田「転用って何ですかって聞きたいですよ」

水島「いや、全くそうですねぇ」

用田「すみません、余計なことを言って」

水島「それとアメリカのドルベースとは、また違うところあるんだろうけどもね、特に円安になっているから差は酷いですよね。今、将官以下の、佐官以下のね、みんな、そういう対応が、あまりにも違い過ぎるっていうねぇ」

矢野「だから兵器だって、国土戦に合わないような、しかも古い兵器を高く買わされるっていうことになるんですよ」

水島「馬鹿みたいですけどね」

用田「さっき申し上げたように、立派な装甲車があるのに外国から買う訳です」

矢野「外国製」

水島「ほんと、ま、まぁ、ねぇ…」

用田「日本のやつを育てる、いや、だって…」

水島「これって選定するのは、皆さんじゃなくて内局ですか」

用田「装備庁です」

矢野「装備庁。だから、まぁ…」

水島「あぁ…内局、ちょっと改めさせないといけないね」

矢野「(笑)」

用田「だから正に車体なんかしっかりして、いいですか、１０５ミリのガンを載っけたやつを最初に造ったんですよ。だから、どんな車体でも耐えられるはずなんですよ、何か出せば」

水島「そうですよねぇ」

用田「それが一番、簡単な兵員輸送車って、ここに書いているけども、装甲車、これがフィンランド製ですよ。何ですか、これ。一番、数があって、一番、金が入るとこですよ」

水島「うぅ〜…ねぇ」

用田「あぁ、すみません」

水島「じゃあ、防衛産業を育てるっていうことは、いかに大事かっていうね」

用田「全然、育っていません。逆です」

水島「う〜ん、全く。どんどんラインを減らしているっていうね」

用田「減らしている」

水島「三菱でも何でも」

用田「だから技術者も居なくなる」

水島「はい。はい、モーガンさん、お願いします」

モーガン「有難うございます。今日、本当に先生方とご一緒に出演させて戴いて本当に光栄です。大変、勉強になりました。先程、伊藤先生の方から痛切なアメリカ人批判がありましたけれども、それを認めざるを得ない。私達は本当に哲学が嫌いです。冷戦はソ連って哲学的な唯物論者で、我々は非哲学的な唯物論者で、我々が勝っちゃった訳で、その延長線上でＬＧＢＴとかジェンダーとか、もう本当に教養の無い人が教鞭をとれば、そのような科目を教えるっていう本当に哲学レベルが低いです。日本国家とかアメリカ国家とか、私は何故、国家の意識が低いかって言うと、国家は、そもそも乗っ取られていますので、お互いに」

水島「はい」

モーガン「存在しないと思います。アメリカの場合を見ると、例えば国境とか、トランプが今、もう弾劾に近い迫害を受けていて、ワシントンは、ただのファシスト、グローバリストの存在になり下がっていて、私が、例えば櫻井よしこさんに直接、そのことを言いました。櫻井よしこさんは未だに拝米活動を続けています。それはどういう意味かと、皆様、ご自分で判断して下さい」

水島「はい」

モーガン「要は、アメリカも日本も、例えば次の戦争で死亡すると、皆さんの棺の上に虹色の旗をかけるかのような、もう完全にグローバリストの為に私は死にます」

水島「うん」

モーガン「日本国家も大分、前から死んでいます。日本国憲法は、その死亡証明書だと思います。だから意識が無いです。日本国民は自衛隊が戦うか戦えるかって日本国民は、みんな、もう自衛隊になっていると思います。要は、もう敵に殺されています」

水島「うん」

モーガン「この国の国民が、そのご紹介された文書は本当にショッキングでトップから裏切られている訳で、我々も、もう、みんな、兵士のような感じで、あの連中の為に死んでいます。医療で亡くなっているというご指摘があって、ワシントンは死の文化です。あのワシントンは死の文化、死のカルト、Death Cult。国内でそのブローカーとなっているのは、櫻井よしことか拝米保守。本当にアメリカの猿真似をして喜ぶと、伊藤先生がおっしゃった通り、あの連中は日本人が死んでいっても、ウクライナ人が死んでいっても、それは自分の儲けに繋がるので、あいつらは何も反省しないで、もう永遠迄、アメリカの猿真似をし続けると思います。

死のカルトです。Death Cult。一刻も早く独立して下さい。冒頭で、私が言及させて戴いた荒谷卓さんです。あの方は今、自衛隊から離れて、武士道をされているみたいで、日本の精神は物凄く強いと思います。いくら叩いても文化は死にません、と思います」

水島「うん」

モーガン「日本の精神は、未だ未だ健全だと思います。潜在的かもしれないですけれども、生きています。用田先生がおっしゃったハート。私は、何故、日本人、この国が好きかと言うと、まぁ、景色は綺麗ですけれどもハートが一番、好きですよ。日本人のハート。真心。熱いですよ。

それは、いくら叩かれても死なないで、精神問題だと思います。自衛隊は、もうワシントンの傀儡組織になっていますので、アメリカみたいに州兵とか、まぁ、日本の場合は県兵ですか。例えば、こっそりと訓練するとか、もう自衛隊を期待できないのであれば、アメリカみたいに訓練して次の戦争に備える。本当に国の為に戦う。そのような精神が、そこから湧いて来るのではないかと期待しています。以上です」

水島「はい。有難うございます。伊藤さん、お待たせしました。最後にお願いします。はい」

伊藤「はい。まず、ちっちゃなエピソードを紹介しますけれども、僕の好きなロシアの国際政治学者のセルゲイ・カラガノフが最近、何処かの雑誌のインタビューを受けていまして、彼は現在、ロシアが巻き込まれているアメリカとの、もしくは、アメリカ、ヨーロッパとの闘争は２０年ぐらい続くだろうと」

水島「なるほど」

伊藤「だから、もう我々は、この闘争、紛争が２０年間続く覚悟で今、準備していると。２０４０年代になれば、国際情勢が落ち着いて来るかもしれないと。その時に生き残っているのはロシア、中国、アメリカ、インド、この四か国だろうと」

水島「うん」

伊藤「彼は今のヨーロッパを見ているとヨーロッパが生き残れるかどうかは分からないと」

水島「うん」

伊藤「日本に対しても同様であります」

水島「うん」

伊藤「だから、とにかくロシア政府でカラガノフっていうのはプーチンに非常に近い人です

けれども」

水島「そうですね」

伊藤「ロシアの要人達は、この国際紛争が２０年間続いても、我々は頑張って生き残ると」

水島「うん、うん」

伊藤「そういう風に考えているようです。僕は個人的には最近、ちょっとだけ考えを変えまして、今迄、僕は戦略核弾頭を２００発、持つ必要があると言っていて、それは変えていないんです。ただ戦略核弾頭と戦術核弾頭には違いがありまして、戦略核弾頭っていうのは、長距離のミサイルに載せて相手の大都市を破壊する為の兵器です。

この戦略核弾頭、核兵器っていうのは、俗にMutual Assured Distractionと呼ばれていまして、お互いに戦略核を撃ち合ったら両方とも滅びるという兵器でありまして、ちょっと変な言い方ですけれども、だから両方共、滅びる訳ですから実際には使えない訳ですよ」

水島「うん」

伊藤「だけど使えないけれども絶対に必要です。要するに、いざとなれば、お互いの貴方の国の敵国の１００から２００の大都市を全て破壊するという兵器ですから、使えないけれども、使うような事態になったら大変なことになる訳ですけれども、それにも拘らず持つ必要があると」

水島「うん」

伊藤「最近、僕がちょこっと考え方を変えたのは、戦略核の２００発に加えて戦術核兵器も６００発ぐらい持つ必要があると」

水島「うん、うん」

伊藤「何故ならば戦術核兵器っていうのは、アメリカでもロシアでも、最近は中国でも使える兵器だと」

水島「うん」

伊藤「使える兵器として認識されているんですね。自分の国の通常戦力が相手の国の優越した通常戦力とぶつかって、自国の通常戦力が潰されるような事態になれば、戦術核っていうのは戦略核の二十分の一、三十分の一、四十分の一ぐらいの破壊力しか持っていない兵器ですから、相手側の通常戦力に戦術核を撃ち込むと。で、そうすると、どうなるかって言うと、中国にしてもアメリカにしてもロシアにしても、例え通常戦に於いて優越な立場に立っても、相手が戦術核を使って反撃してくるかもしれないと思うだけで、相手を追い詰めることをしなくなる訳です」

水島「うん」

伊藤「これは、とても重要ですね。ですから戦術核っていうのは使える兵器だけど、使える兵器であり、しかも相手の国の通常戦力を戦争の最中に抑止する機能を持つと」

水島「そうですね」

伊藤「そうすると日本は、もう経済規模から言って中国の通常戦力に対抗しても敵う訳が無

いんです。もう絶対に敵わない訳です。ですから日本は、ロシアとか中国の通常戦力と戦っても勝つ見込みはないですから、それを Compensate、俯瞰する為に戦術核弾頭、核弾頭は６００発ぐらい、持っといた方がいいと。

先程、申しましたように、非常に小型ですから造るのも簡単で、経済的にも負担が少ないですから、国防の事を考える場合には、戦略核を２００発、戦術核を６００発と、それを、最優先の課題として戴きたいとそういう風に思っています」

水島「なるほど。はい、有難うございます。誠にリアルな話でね、前も核兵器の話が出た時、潜水艦型が一番、この間、海の方の矢野さんが言っていたのは、２兆円あれば、４隻体制とドックと原潜の核兵器、核武装の体制が出来るって。だから２兆円ですから４隻。４倍にして８兆円だったら１６隻体制ができて、相当、強力な原潜核武装部隊が出来ると。

ここは中々特定できないですから、今、伊藤さんがおっしゃっていた戦術核の問題として、抑止力としても通常の戦力に対しても、効果があるだろうというようなことは、あったと思うんですが、今回、最低でも四十何兆円を使うんですよ。何処に使うんだっていうね。こういうことをやれば８兆円でドックまで入れて、あと５年かかると言っていましたけどね、今、やっても。

でも、それだけ出来たら大変なことになるじゃないかというようなことがあるのと、さっき、電磁波系の兵器とかね、ドローンとか全部合わせれば、意外と運用が、そんなにお金を使わなくとも集中出来れば、技術力、ある程度ある訳だから、今、そういう感じがしましたけどね」

用田「一つ、最後の最終兵器として、それは必要ですね」

水島「はい」

用田「ＳＳＢＬとして」

水島「そうですよ」

用田「でも、その為にはイギリスもフランスも一緒だけども、３隻の攻撃型潜水艦と１隻のＳＳＢＬってやつはペアですね」

水島「あぁ、そうですね」

用田「でも日本は攻撃型潜水艦も必要です」

水島「そうでしょうね」

用田「基本的に、それは太平洋に出て来るって、私、言いましたね」

水島「そうですよ」

用田「これは今、アメリカに頼るだけですよ」

水島「そうなんですよ」

用田「だから、これは決定的に違うものがあるんで。しかし、それは最後の弾は作れなきゃいかんけども、邪魔も多いだろうなと。だから、私が申し上げたように、しつこいようですが、その対艦ミサイルっていうのは巡航ミサイルですから」

水島「そうですよね」

用田「千キロ飛ぶっていうのは、１２００キロから１３００キロ飛ぶ訳ですから、それでやると使い出もあって幅があって決定打ということではないとしても、基本的に、その組み合わせですよね」

水島「まぁ、そうですよねぇ」

用田「だから、それは必要ですよ」

矢野「それは、もう極超音速の軌道型兵器にしないと駄目だと思いますけども」

水島「なるほど」

用田「そうですね」

矢野「こういうミサイル防衛システムの突破能力を考えると、えぇ」

水島「まぁ、そうですねぇ」

用田「だから、それは発射部隊として当然、それは必要になってきますよね」

矢野「ねぇ、巡航ミサイルでは迎撃されてしまう」

用田「あぁ、ロシアは、そうじゃないですか。何て言うんですかイスカンダルですか。ほぼ迎撃出来ないですもんね」

水島「超音速って言うかね。今、やっていますよ」

用田「だから、やっぱり、それは組み合わせですよ」

水島「なるほどね」

用田「発射型と、低発射型と…」

水島「はい。やれば出来るというね。やれない根性の腰抜けばっかりだっていうねぇ。思い切ってねぇ、暗殺が怖くてねぇ、いや、何だか分かんないけど、長尾さんが前に安倍さんが死んでから、国会議員がみんな、本当にビビりまくりですと言っていましたけど、こんなことじゃ、駄目だぞと。ということでありますね。

はい。今日は『本当に自衛隊は戦うのか戦えるのか』というテーマで、大変、重要なお話を皆さんから伺いました。今日はどうも有難うございました」

一同「有難うございました（礼）」

＊＊＊＊＊＊　お　わ　り　＊＊＊＊＊＊